

TOTO

2022年春号

Toward a Creative
Architectural
Scene

通信

増 築
す る
変 革
主 屋
特 集
を

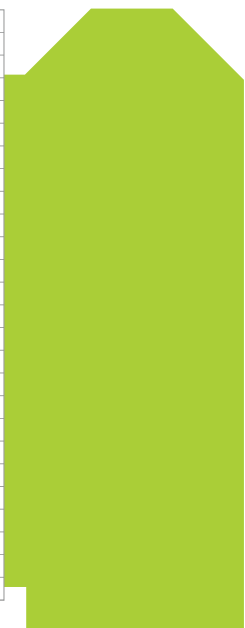
Special Feature / Innovative Extension

誰かが五・七・五の上の句を詠んだ後にまた別の人が七・七の下の句を詠む。そしてさらに別の人が上の句を付け加えるというように、人を変えながら、言葉がつながっていく連歌。どう下の句を詠むかによって、上の句の感じ方がすっかり変わる。それと同じように、過去の人から受け継いだ建築に、新たに増築をするとき、主屋の建築のあり方を生まれ変わらせるようなアイデアがある。ただの機能の付け足しではない、既存の建築を変革するような増築を特集する。

Case Study

01

0 project



変革する増築

Case Study

03

始めの屋根



宮城島崇人	4
宮城島崇人	10
村山 徹+加藤重矢子	18
増田信吾+大坪克亘	26
平井 充+山口紗由	34

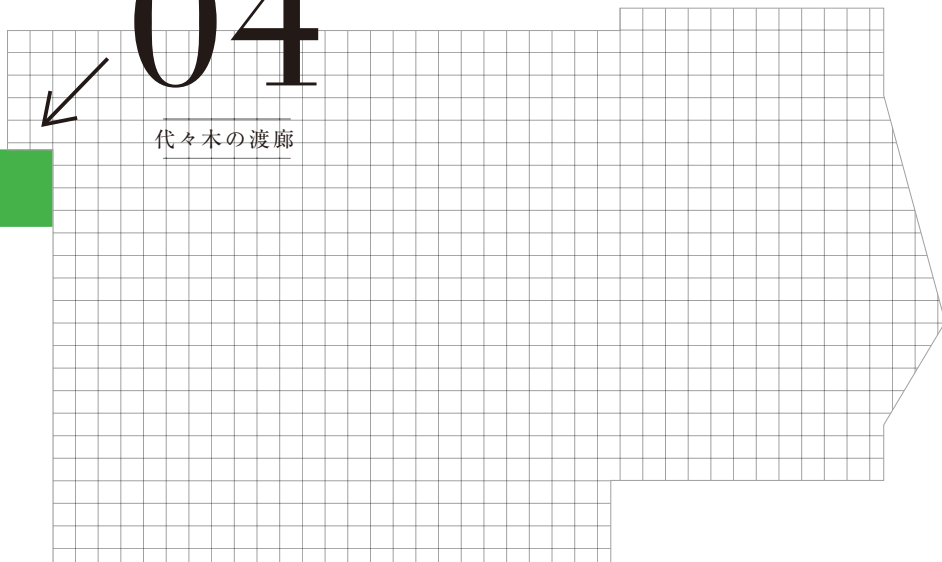
シリーズ

古写真でみる建築家のアトリエ1	文/山村 健 アントニ・ガウディ・イ・クルネット	42
現代住宅併走52	文/藤森照信「空環周住器」設計/六角鬼丈	44
最新水まわり物語58	天神ビジネスセンター	50
News File	TOTO News, Cera Trading News, Book	54

Case Study

04

代々木の渡廊



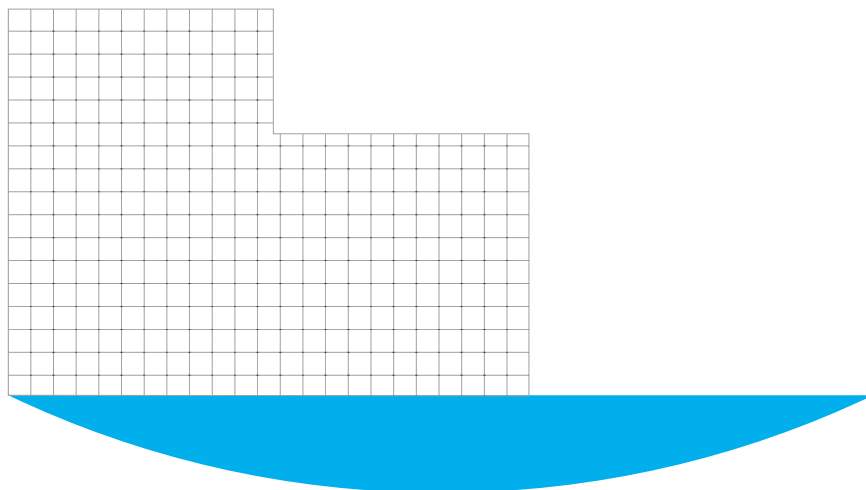
Special
Feature
Innovative
Extension

特集 主屋を

Case Study

02

家と庭と代



TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 530
Spring 2022

インタビュー	上の匂の主屋と下の匂の増築	
ケーススタディ1	光の躯体が主屋を明るく	「O project」
ケーススタディ2	異質な半月型のホールを取り付ける	「家と庭と代」
ケーススタディ3	主屋と庭のあり方を変える「あわい」	「始めの屋根」
ケーススタディ4	RC造と鉄骨造に木造で増築する	「代々木の渡廊」

『TOTO通信』は
インターネットでも
ご覧いただけます。

→ <https://jp.toto.com/tototsushin>



上の句と主屋の

インタビュー

特集
主屋を
変革する
増築

聞き手
伏見
唯

Special
Feature
Innovative
Extension
Interview
Miyagishima Takahito

リノベーションが建築家の仕事として認識されるようになって久しいが、今回注目したのは「増築」という手法だ。増築は部分的な操作に見えるかもしれないが、ガラリと全体をつくり変えてしまうリノベーション以上に、建築家のアイデアや姿勢が目に見えて表れるように思われる。建築家は現在、増築という手法にどのような可能性を見出しているのだろうか。宮城島崇人さんに聞いた。

「O project」のキヌチノ棟にて。この増築を媒介として、主屋と敷地隣にある公園の関係性が、劇的に変化している。

インタビュー

宮城島崇人

増築の下の

伏見 本特集でイメージしたのは、古代からたしなまれていた連歌（*1）でした。上の句が詠まれ、それを受けて他者が下の句を詠む。下の句がいかに詠まれるかで上の句のあり方も一変するのですが、上の句を住宅の既存主屋に見立てれば、「主屋を改革する増築」は下の句に相当するのではないのでしょうか。

宮城島 増築によって既存の主屋が孕んでいた性質が変わる、ということですね。僕の場合、上の句を既存主屋という建築単体ではなく、環境や住文化や社会などさまざまなレベルでとらえ、それらに対して下の句を詠み返していきたいという想いがあります。

伏見 建築家が手がけるうえでは、単に人が住めればよいものをつくるのではなく、環境や社会を変えていこう——すなわち「変革」という意思があるかと思えます。宮城島さんがおっしゃった環境や住文化といった課題は大きなもので、あらゆるものを包含することが求められる新築では、時として命題に対する解が見えにくい。一方で、部分的に手を加える増築からは課題が明確に見えやすく、解もわかりやすく建築として結実するのではないのでしょうか。

宮城島 確かに更地に新築するよりも、増築はビフォア・アフターが目に見えてわかるので、コンセプトを表現しやすいし、人間の認識や暮らしを変えたいという建築家の意思も

浮き彫りになりますね。

伏見 人を変える、ということであれば、「居は氣を移す」という孟子の言葉があります。住宅は人の気分や性格を変えるほどの力があるというのがその意で、宮城島さんの「O Project」(10ページ)でも同様のことがいえるのではないのでしょうか。閉鎖的だった主屋を増築により公園に開くことで、住宅と公園の関係性が変わり、さらにコミュニティづくりのきっかけにもなり得る。

宮城島 新しいものが加わることで既存の環境や価値観、認識が変わる現象には興味があり、そのような気づきを与えられる場所をどれほどつくれるかは、つねに意識しています。まずは身のまわりのことに関心がなくては、世界とのつながりが感じられず、自分が世界というひとつの大きな環境のなかで生きているという実感も湧きません。「気」と同じく、自分が身を置くまわりのことも観察するようになる。世界が豊かになる。そのための下地となるような建築をつくりたいですね。

伏見 「O Project」でいえば、増築棟は既存の主屋の延長とは一線を画したつくり方をされていて、あえて文脈を断ち切ることで、大量生産された2×4住宅である既存の主屋の見え方が相対的に変わってくる。今回のケーススタディ4件は、いずれも既存部に融合されず、独立した存在としてつくられていると

主屋に

従属せずに

対話する

増築

ころに共通点があり、たとえ主屋が壊されても増築部だけ存続していくことも可能で、逆に増築部をいつでも壊すこともできるのが興味深いところだ。

宮城島 僕にとつて自立性というものは人格のようなもので、2×4の主屋には2×4の人格があり、そこは否定したくはないのですね。もちろん構造や法規、コストなどの制約はありますが、既存の主屋をそれたらしめている要素を改変したくないのです。人格を剝奪して主屋と増築部があいまいに溶け出して一体化してしまつと、対話ができなくなつてしまいます。あくまで主屋と増築部は異なる存在でないと、それぞれのバックグラウンドやよさが引き出されず、新しい可能性が生まれる芽を潰してしまいますから。

リノベーションを引き合いに出すと、増築に比べて介入の深さに幅があり、既存部に対して改修した部分を明快に提示する手法もあれば、崩して一体化することも容易です。一方、増築は、既存と増築という明瞭な輪郭をもっているのが別人格を保ちやすいですね。

伏見 既存と増築の輪郭をつくる、ということといえば、ムトカ建築事務所の村山徹さんと加藤亜矢子さんが手がけた「家と庭と代」

建築単体ではなく、
環境や住文化や社会など
さまざまなレベルで
下の句を
詠み返していきたい

Miyagishima Takahito

(18ページ)は、再建築不可住宅ゆえに50年にわたり無作為な増築が繰り返されてきた背景があります。現行法規では永遠にリノベーションされることではしか存続できません。将来的に手が入ることを見据え、そのときに何らかの手がかりがないとやりにくいだろう、と下地を整理するような増築です。

宮城島 最初に既存に対して手を加えるのなら、元の主屋をつくったときと同等以上の理念をぶつけたり、痕跡を残したりしておかないと、創建当初の理念があまりにまあいなくなったまま引き継がれてしまいます。結果としてさらに次に携わる人は困るでしょうね。建築家が増築に対してこのような姿勢をとるようになったのは、やはりスクラップ&ビルドが終焉を迎えた

ことが社会的にも認知されるようになった、比較的近いことではないでしょうか。

いずれにせよ、今の時代を生きている僕らがどのような理念をもっていたか建築に残していくことは重要で、そのような見方で増築をとらえている節はあります。その時代で手を加えたことがわかるようにして時を重層させていくという意味では、文化財の保存・修復にも通じるものがあるかもしれません。

伏見 文化財といえば、鉄骨トラスを用いた

異質なものの
出合いが生む
化学反応

東大寺大仏殿の明治の大修理はその一例ですね。修理した場所を明確にするための構法です。今回のケーススタディでは、メグロ建築研究所の平井充さんと山口紗由さんが手がけた「代々木の渡廊」(34ページ)にも通底するものがあります。清家清が1970年に設計したRC造の主屋と、氏の事務所・デザインシステムが敷地内に1988年に建てた鉄骨造のはなれを、ガラスと木軸でできた軽やかな渡り廊下でつないだもので、上の句と下の句の次にさらに増築という新たな一句を詠むことで、既存住宅の個性を浮き彫りにし、時間軸や歴史性を明瞭に表現しています。

宮城島 歴史性の表出も、環境や都市の特徴も、性質の異なるもののレイアウトとして認識されるので、やはりそれらはあえて溶け込ませないで、異質のものとして並べてみたいですね。人間関係も同様で、異質なものとのお出合いには化学反応があると思うのです。もちろん、やってみないとどのような反応があるかわかりませんが、建築は、都市空間に対してもっと実験的な姿勢で向かってよいのではないのでしょうか。

伏見 その点、増築はまさに異質なものの出合いでもあります。たとえば當麻寺本堂が古代仏堂から中世仏堂に変容する過程に

増築からは
課題が明確に見えやすく、
解もわかりやすく
建築として
結実する

Fushimi Yui

は、異質な要素が出合うタイポロジーが見て取れます。本来は仏堂だけだったところ、人が拜謁するための空間が必要となり、増築がなされて双堂(*2)のように。それまで閉鎖的だった本堂が増築により「見られる」空間になっただけでなく、仏のための空間に、人間という異質なものに合わせた空間が付随することで、仏堂全体の空間性が切り替わり、両者が調停を図るために境界面が生まれ、デザインに創意工夫が凝らされ、建築として成熟を遂げる。「O project」も、境界のデザインに意識的です。

宮城島 双堂の状態は、異質なものの同士の出合いを彷彿とさせますが、その後の過程は改修よりの増築という印象を受けました。「増築による変革」を考えたときに、増築には新築よりの増築と、改修よりの増築があるのかもしれませんが。主屋と増築は、ある種の依存関係でもあれば共犯関係や対立関係にもなり得るなど、さまざまな関係性が考えられますね。

「O project」でいえば、主屋に接するよう新築をつくったようなところもあり、自立性を強く意識しているため、境界面のデザインもあえて寄り添わせないことを心がけています。

伏見 主屋の外壁を残して増築棟から見える

*1 連歌

短歌を上(五・七・五)と下の句(七・七)に分け、複数人で詠む詩歌。上下二句ずつを詠む短連歌と、多人数で上下を交互に詠む長連歌に分けられる。

*2 双堂

仏堂の形式のひとつ。仏像を安置する本堂の前に、礼拝や儀式を行うための礼堂を設ける。

自立性から

得られる

もの

ようにしたり、主屋と増築棟に段差をつけたり、増築棟の柱に象徴的なスケールを与えたりなど、さまざまなディテールの集積から自立した境界への意識がうかがえます。

宮城島 自立性の追求には、対象から一步引いて、客観的に見られる距離感がほしいということがあるのかもしれませんが。一体化してしまうと、主屋と増築棟を対象化して見ることができなくなり、互いを引き立て合う関係性があいまいになってしまう。そのために素材や光、スケール、高さといったさまざまなエレメントの対比を積み重ねることで、本質的な成り立ちの違いを鮮明に可視化し、距離感をもって眺められるようにする。完全に一体化すると近視眼的になり、本質が見えなくなることに警戒心をもっているのですね。

伏見 その視点は増田信吾さんと大坪克亘さんが手がけた「始めの屋根」(26ページ)にも相通じるものがあるように思います。築50年の鉄骨造の主屋とはなれ、庭の関係性を結ぶべく、主屋前面に4本の鉄骨柱で支えられた薄いスチールの屋根と階段を増築したケースで、主屋や周辺環境に対して増築部はデザイン的に明らかに異質です。しかし住宅からスケールアウトした屋根と柱があることで、おのずと遠くへ目が向き、暮らしがのびやかになる。増築部は遠望に意識を向けさせる装置ともなり得るのですね。「O project」でも、

開放的な増築棟を通じて遠くの山の存在が感じられる環境との接続がなされています。

宮城島 僕にとつては、敷地のなかで建築を完結させる、という意識が希薄なのかもしれません。環境や人の生業、みなが考えている未来といったもののほうが、得てして建築よりもスパンが長いものだから。建築家がかかわれるのは、その長い時間のうちのわずかな一瞬で、そのときにあいまいなことをしては、将来的に建物を受け継ぐ人にとって、手を加える人にとつても、建築の本質が伝わらない。改修対象にすらならず、取り壊されて建築の寿命が絶たれるということにもなりかねない。だから、建築が環境の一員として参加しつづけるうえで、自分はこういふ者だと、答えられたほうがよい。「主屋を革新する増築」はそんな自立性を獲得するための、今の時代ならではの手法といえるのかもしれない。

宮城島 崇人

みやぎしま・たかひと／
1986年北海道生まれ。
2011年東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。同年マドリッド建築大学(ETSAM)奨学生。13年宮城島崇人建築設計事務所設立。おもな作品に「サラブレッド牧場の建築群」(16)、「山裾の家」(18)、「酒蔵の米倉庫」(22)など。



Fushimi Yui

聞き手
伏見 唯

ふしみ・ゆい／編集者、建築史家。1982年東京都生まれ。早稲田大学大学院修士課程修了後、新建築社、同大学大学院博士後期課程を経て、2014年伏見編集室を設立。「TOTOTO通信」などの編集制作を手がける。博士(工学)。

Special
Feature
Innovative
Extension

Case Study

01



O project

- 宮城島崇人さんが提案した増築棟は閉鎖的だった主屋に光を取り込みながら同時に公園や近隣へとコミュニティを拡張する

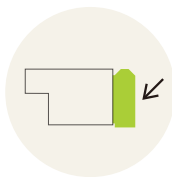
明るく開放的な増築棟。キッチンでもあり、今後は食を介した集いの場として使用することも想定している。



特集 / 主屋を変革する増築 / ケーススタディ 1

作品 O project 設計 宮城島崇人

光の軀体が主屋を明るく

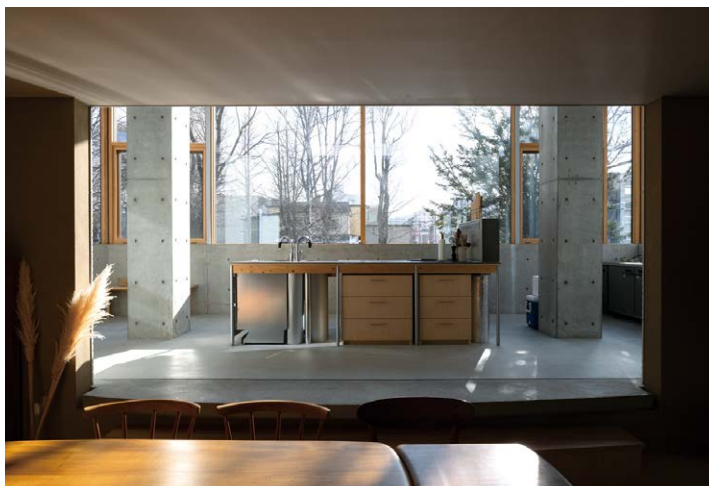


0 project



↑ダイニングから見た増築棟は、明るさと段差でサンルームのように見える。

↓増築棟の大きな窓を通して、光が主屋の奥にまで届くようになった。



←ライブラリーからダイニングと増築棟を見る。

その街中の公園には、日常と非日常のはざまにたたずむように、小さな建築が立っている。地面から浮遊した赤茶色の躯体は、水平に連なる大開口をもち、そこからは住宅のスケールを凌駕した2本のコンクリートの柱がシンメトリーに立っているさまが垣間見え、公園のパビリオンのような印象を受ける。しかし、背後には北海道でよく見られる2×4住宅（木造枠組壁工法）が立っており、道路側にまわれれば、この2×4住宅が主屋で、躯体が増築棟であることがわかる。

主屋の増築でありながら公園の増築にも見て取れる両義的なあり方「0 project」は、増築という行為の意義をあらためて投げかけるものだ。

食と暮らしの ラボラトリー

「増築は僕からの提案でした」と語るのは、宮城島崇人さん。住まい手は北海道で育児休暇を過ごしたことをきっかけに東京から札幌に移住、公園の一角という立地に惹かれて築23年の2×4住宅を購入した。夫妻は食にまつわる仕事に携わり、北海道の素材を使った食品の開発や料理を介したコミュニティづくりなどを思い描き、集いの場ともなる広い

既存部をむしろ残すことで
主屋と増築棟の自立した関係性が明瞭になり
互いを引き立て合う





↑道路側。キッチン棟へ
出入りがしやすいよう、
右奥に新たに出入口を
設けた。

キッチンと仕事場、そしてライブラリーを備えた、食と暮らしのラボラトリーのような住まいが求められた。

ただし建坪30坪の2階建てでは面積的に要件を満たせない。また2×4住宅は構造芯上の壁を動かしづらくプランニングも制約を受け、閉鎖的で採光も得にくい。さらに既存住宅の公園側にある庭には人目を阻むような高いフェンスが立ち、公園の開放的な環境と相容れない——これらの課題を解決する方法が増築だった。

増築したのは公園側の庭に設けた、9・3坪のRC造のキッチン棟。500mm角の鉄筋コンクリート柱を2本立ち上げること、地上から1・2m浮かせた床スラブを支え、屋上はファームガーデンとした。主屋とはエキスパンションジョイントでつなぎ、1階は仕様の規定上、最大限とれる4m幅の開口を設けて増築棟と行き来する。

主屋のプランニングは増築棟を主軸に手を入れる方針として、キッチン棟に隣接してダイニングを配置。さらに既存の構造壁を生かしてワークスペースとライブラリーを設けた。また1階にあった浴室・洗面室は2階に上げて、水まわり空間を屋上菜園のバックスペースとして使い、庭仕事に役立つように。構造的な制約はあれども、主屋は1階、2階ともに、増築したキッチン棟と屋上菜園に至るアプローチとして再編成した。

揺るぎない 自立性を貫いて

「O project」を貫くのは、徹底した「自立性」だ。増築棟は主屋に従属するもので

はなく、主屋に対しても公園に対しても対等な関係を築くことができる、座標軸のような揺るぎない存在として位置付けた。

増築棟を浮遊させる1・2mという高さも、公園から適度なプライバシーを確保しつつ、公園・主屋の双方から見たときにステージのような存在になることを意識して決定した寸法だ。増築棟は主屋から見れば一段高く設けられた、眩しく見上げるサンルーム。一方、公園から見ればバビリオンのようにも映り、主屋・公園どちらの環境に身を置くかで見え方やスケール感が変わってくる。

増築棟と主屋の自立性を獲得するうえで、構造的に互いに自立しているだけでなく、増築棟は工法も外観もあえて主屋を踏襲していない。主屋の外壁は大量生産された規格住宅の面影を残したままだ。何らかの歴史性が見出せるならまだしも、手を入れたくなるのが建築家の性^{さが}では——と思うものの、「高気密・高断熱を実現しやすい2×4住宅は北海道で普及し、住宅地の景観を形成してきました。ただその事実をわざわざ否定しなくてもよいと思うのですね。むしろ残すことで、主屋と増築棟の自立した関係性が明瞭になり、互いを引き立て合うと考えました」と宮城島さんは語る。

ディテールも、増築棟・主屋それぞれ異なる空間の特性が表現できるように注力。増築棟はコンクリート打放しやガラスなど硬質な材料を素で使い、主屋はシナ合板や土壁など軽やかさや温もりのある材料をアツセンブルしている。

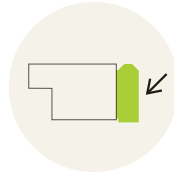
光という点でも対照的だ。ガラス面から



2階ホールから洗面室、バルコニーを見る。さらに奥には、キッチン棟の屋上菜園。水やりや植物の手入れがしやすい動線に配慮した。

Special Feature
Innovative Extension
Case Study

01



O project

生にあふれた新しい建築を
恐れずにづくり、人の営みや文化を
積極的に豊かにしていきたい

れるのだ。

ところで宮城島さんは、明るくて開放感ある増築棟をなぜひビングにしなかったのか、と問われることがあるという。「ほどよいこもり感のある空間のほうが寛ぎやすいでしょう。キッチンはクリエイティブな行為を営む場所だから、アクティブな公園と

相性がいいし、開放的なほうが気持ちよく作業できるものですから」。

この増築棟がいずれ集いの場として使われるようになれば、公園を訪れる人が住宅と関係を結ぶことができ、公園にとつても住宅が閉じずに開いているほうがよいはずだ——そんなインタラクティブな関係を「自立性」というテーマをもって宮城島さんは描き出そうとしている。

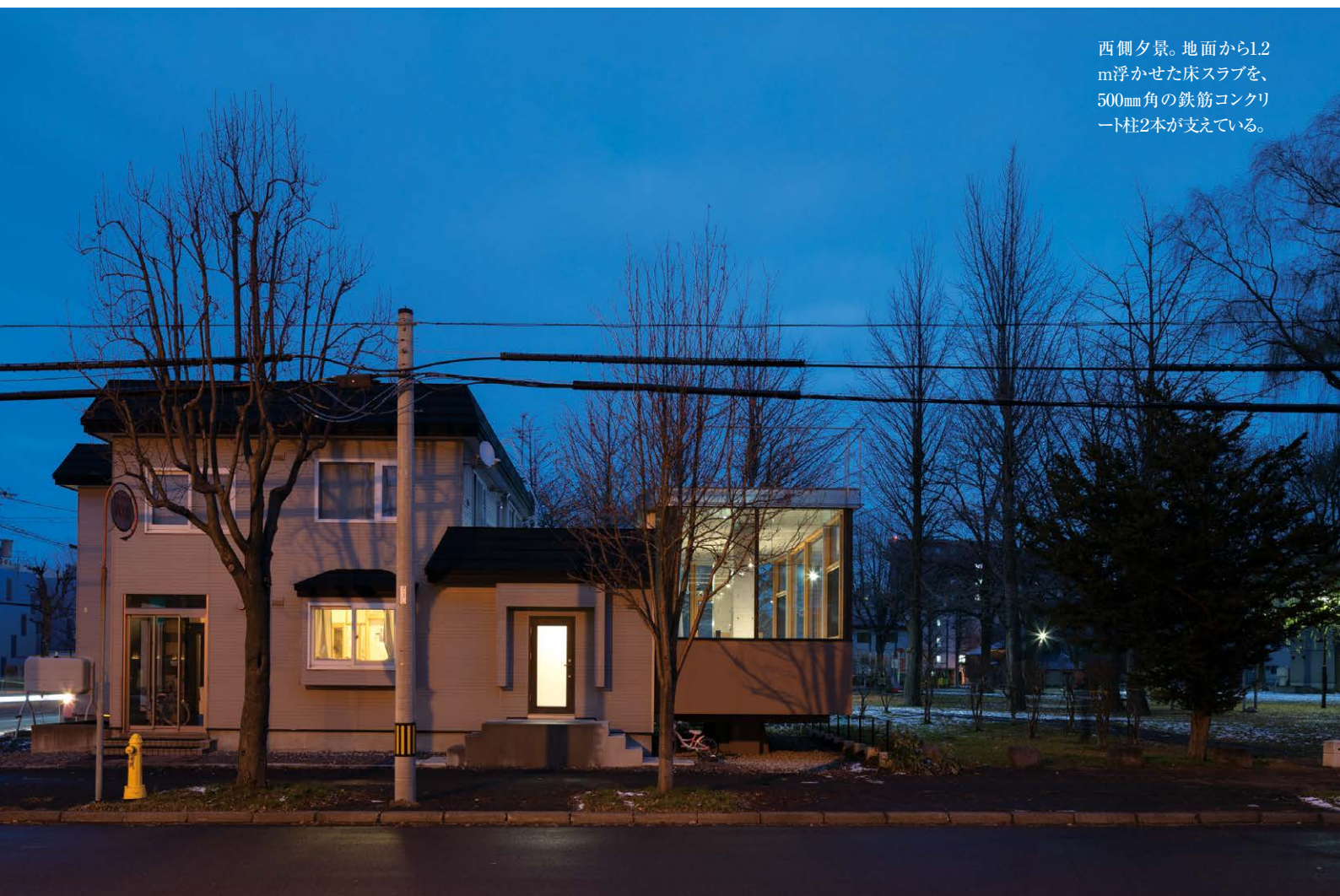
小さな増築が
変える

人の営み、風景、
——そして文化へ

「O project」が見据えるものは、公園が表象する自然と公共性のさらなる先にある「環境」という概念だ。「僕らが身を置いている世界って、性質の異なるものがレイアウトされてきているでしょう。だったら臆せず、性質の違うものを並べようという気になって」と宮城島さん。「O project」だけでなく、RC造と木造、そして公園と、3つの異なる要素が存在する。さらに都市に視点を広げれば、そのエレメントは数えきれないほど。敷地内で設計を完結させず、広大な環境の一部にあるものとして建築を逆照射すると、世界は格段に広がって見える。

そこでもキーワードとなるのが、「自立性」だ。宮城島さん自身はコンテクスチュアリズムには否定的で、「いかにコンテクス

西側夕景。地面から1.2m浮かせた床スラブを、500mm角の鉄筋コンクリート柱2本が支えている。



→敷地を囲んでいる背の高いフェンスを、公園管理者と協議のうえで一部撤去した。



←暗くなるとキッチン棟が、公園をやわらかく照らす。

トに働きかけて変えるか」という創発的なスタンスでありたい、という想いを抱いている。

「誤解を恐れずに言えば、今の都市環境をそれほど信頼していません。とくに僕の拠点である北海道は、近代の歴史も150年ほどのもので、守らなければならぬものは少ない。むしろ、もつとアバンギャルドになっていいんじゃないか、とも思っています。そのほうが暮らしも自由になり、環境そのものも豊かになる可能性を秘めているのではないのでしょうか」

ただし個人の所有財産である住宅が社会との接点を獲得するうえで、たまたまのあり方は問われるところだ。過ぎた前衛は、景観や街並みに対して建築家のエゴとして受け止められる懸念はないだろうか。しかし宮城島さんはおおらかに笑ってこう語る。

「北海道では一時期、各地に公共施設としてガラス張りの植物園がつけられたものでした。真冬は氷点下になるにもかかわらず、常夏を楽しみたいという人間の欲望の所産で、エコロジ的にも褒められたものではありません。けれども僕にはそうした欲望は人の力強さとして、とても魅力的に映るんです。建築家の倫理観のみで生にあふれる空間を否定するべきではないし、むしろそうした生きる力を建築で引き出したい。異物をつくることを恐れず建築に向き合うことで、人の営みが変わり、風景が変わり、いつか文化として根付いていく。建築を通してそんな手助けができれば——と思っています」

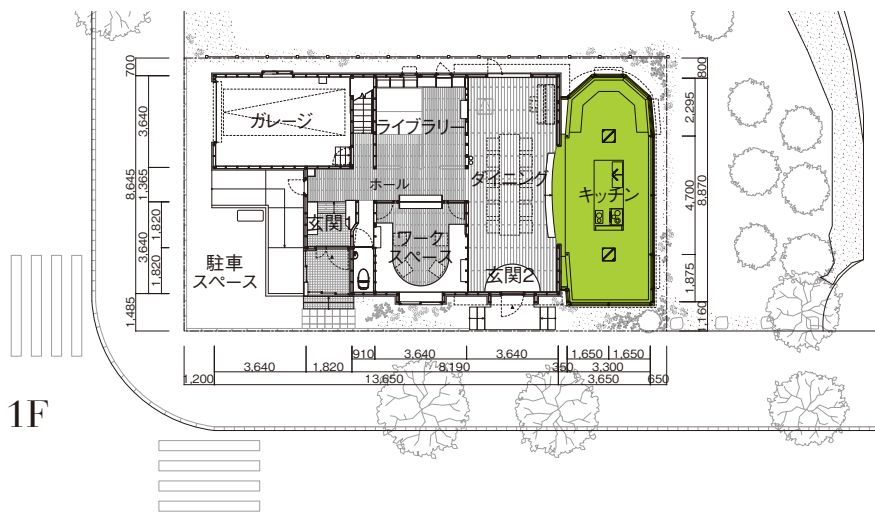
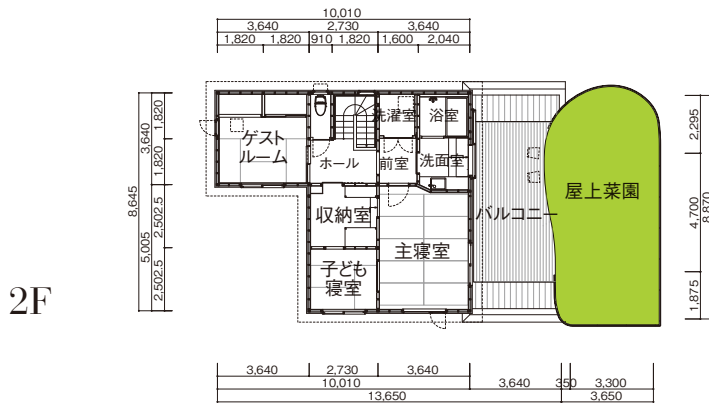
約9坪の小さな増築には、北の広大な大地のフロントティア・スピリットが宿っている。

After

増築後の平面図

0 2 4m

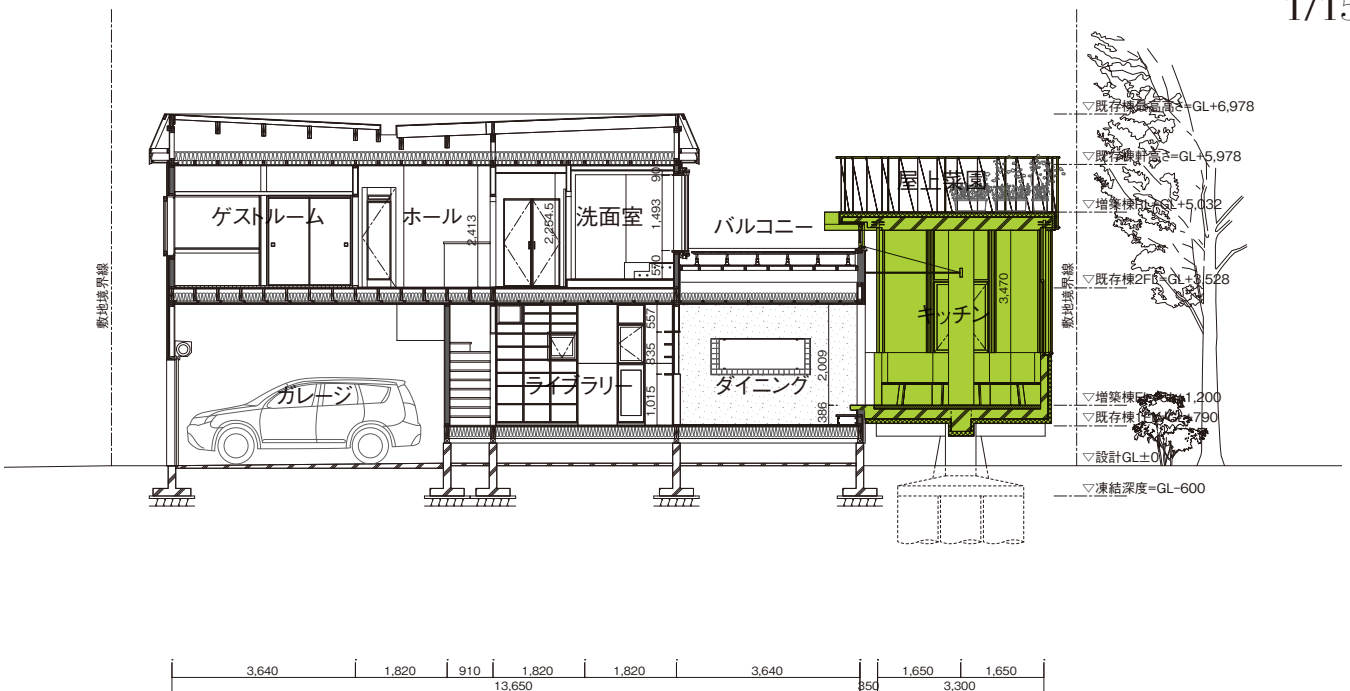
1/300



増築後の断面図

0 1 2m

1/150





O project

建築概要

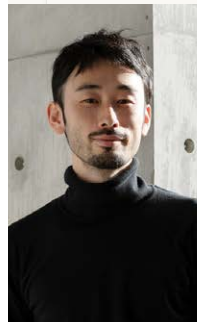
所在地	北海道札幌市
主要用途	専用住宅
設計	宮城島崇人建築設計事務所
構造設計	yasuhirokaneda STRUCTURE
構造	既存：木造（枠組壁工法） 増築：鉄筋コンクリート造
施工	大元工務店
階数	地上2階
敷地面積	207.39㎡
建築面積	130.57㎡
延床面積	198.87㎡
設計期間	2018年4月～2019年9月
工事期間	第1期：2019年9月～2020年3月 第2期（キッチン棟、リビング）： 2020年4月～2020年12月

おもな外部仕上げ

屋根	FRP防水トップコート仕上げ
外壁	既存南側1階：窯業系サイディング キッチン棟：透湿性左官仕上げ
開口部	樹脂製サッシ 木製作サッシ
外構	碎石

おもな内部仕上げ

ワークスペース	ライブラリー
床	既存カラーフロア
壁	既存枠組およびPB裏面現し ビニルクロス貼り替え カラーコルク ライブラリー：ビニルクロス貼り替え シナ合板のうねワックス
天井	ビニルクロス貼り替え
ダイニング	
床	パーチフローリング
壁	京壁 棧黄
天井	ビニルクロス貼り替え
キッチン棟	
床	シンダーコンクリート
	ファイバー繊維混込み 防塵塗装
壁・天井	鉄筋コンクリート打放し



宮城島崇人

Miyagishima Takahito

みやぎしま たかひと / 1986年北海道生まれ。2011年東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。同年マドリード建築大学(ETSAM)奨学生。13年宮城島崇人建築設計事務所設立。おもな作品＝「サラブレッド牧場の建築群」(16～)、「山裾の家」(18)、「酒蔵の米倉庫」(22)など。

動画をご覧ください。



提供 / 宮城島崇人建築設計事務所

改修前の1階、南面。出窓の外に見える庭に、今回増築を行った。

Before

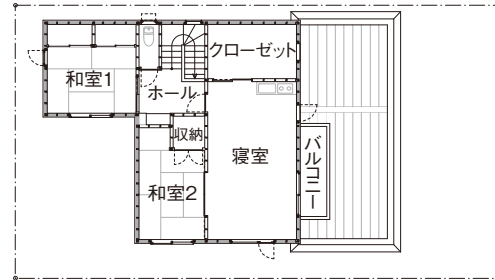
増築前の平面図



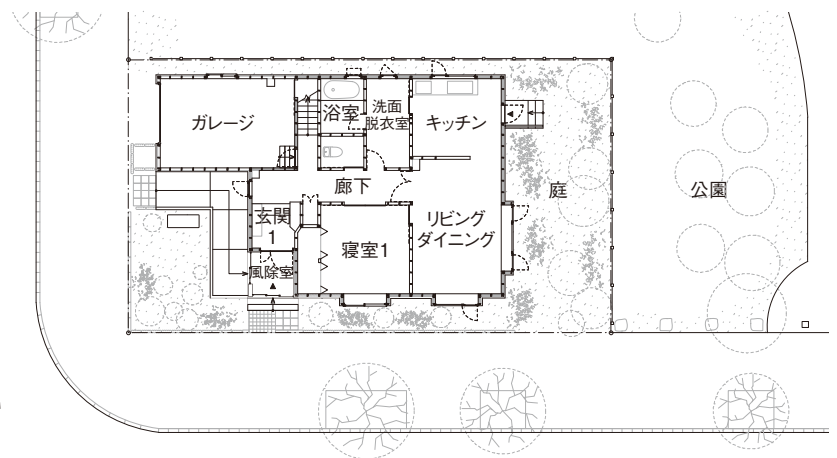
0 2 4m

1/300

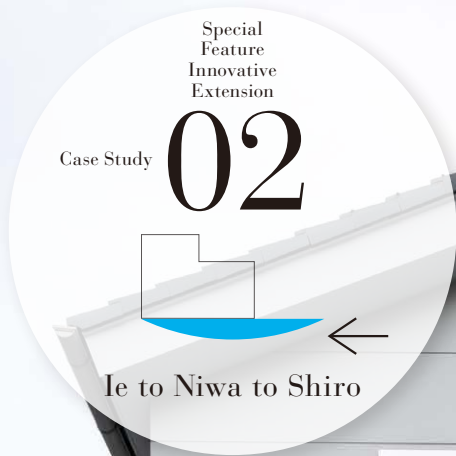
2F



1F



増築前の内観



日本の住宅問題が
凝縮したような既存に対して
村山徹さんと加藤亜矢子さんが出した解決案は
建築確認申請不要の小さな「代」を
増築することだった

南側の「庭」から主屋である「家」と増築された半月型のホール「代」を見る。

南側から見たホール。左手の扉が玄関。ホールの膜天井には、梁の形が浮かび上がり、やわらかな光を透過している。

特集 / 主屋を変革する増築 / ケーススタディ 2

作品

しろ
家と庭と代

設計

村山 徹 + 加藤 亜矢子

異質な半月型のホールを取り付ける

江ノ電の長谷駅を降り、鎌倉大仏に向かう道をそのまま道なりに左に曲がって進むと、大仏坂の切通しが始まる。脇の急斜面には、寄り添うようにして民家が建て込んでいる。谷戸と呼ばれる谷状の地形は、とりわけ鎌倉ではおなじみの風景だが、この大仏坂切通しは中世から続く古道とあって、建て込んだ民家もかなり年季が入っており、しかも目的の家に行くには隣家の敷地との隙間、幅1mにも満たないような小径を延々と30mほど歩いてようやくたどり着く。この地に立つ築50年の家をリフォームしてほしい、とムトカ建築事務所に依頼が入ったのは2018年春のこと。「年離れた両親が住む実家の耐震性が心配なので」と、京都に住む息子さんからの依頼であった。

課題だらけの既存

「まず、住所をスマホに入れても行き方がわからないですよ。表札もないし、途中の家で何度かインターホンを押して、ようやくたどり着いたぐらいで」と、ムトカ建築事務所の村山徹さんと加藤亜矢子さんは振り返る。そこには増築を重ねた木造家屋が敷地めいっぱい立っていた。106㎡の敷地に対して、延床面積が110㎡以上指定容積率が80%なので、大幅に超過している。そもそも接道条件を満たしておらず、再建築不可なのでリフォームしか選択の余地がない住宅なのだが、建築家がかかわる以上、既存不適格のままでお色直ししました、という改築は避けたい。そのためには、リフォームして狭くなるという不条理を、施主に受け入れてもらわなければならぬ。「すでに南側の和室の床が傾いていて、床



リビング。ホールが接したことで、膜天井から降り注ぐ光と、庭側からの風がリビングに行き渡る。

おふたりは思い切って南側の居室を取り除き、さらに湿気でカビが発生しやすい現状から通風をよくするために、東側の擁壁が迫っている部分も削ることを提案した。建蔽率40%の敷地なので、これぐらい劇的に削らないと法規を満たせない。しかし当然ながら、施主の理解を得るのは容易ではなかった。

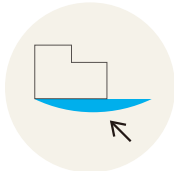
「地盤調査の数値を見せて危険性を知ってもらい、建物を削って庭にしたほうが、アウトドアリビング感覚で室内が広く見え

て、狭くても結果的には環境が確実によくなりますよ、と説得していただきました」

削られた南側居室の1階は、施主のご主人側の母親の部屋であった。長らくこの地

Special Feature
Innovative Extension
Case Study

02



Ie to Niwa to Shiro

減築をしたほうが、

狭くなっても環境が確実によくなると

論理的に説得

に暮らした老婦人が息を引き取った部屋は、ほぼそのままの状態で夥しい数の遺品であふれかえっており、家族も手をつけるのを躊躇っていた。故人の大切な思い出が詰まった場所を、何もない庭空間にするのは、心理的な意味でも理に適っていたのかもしれない。

減築と耐震補強で 終わるには 物足りず

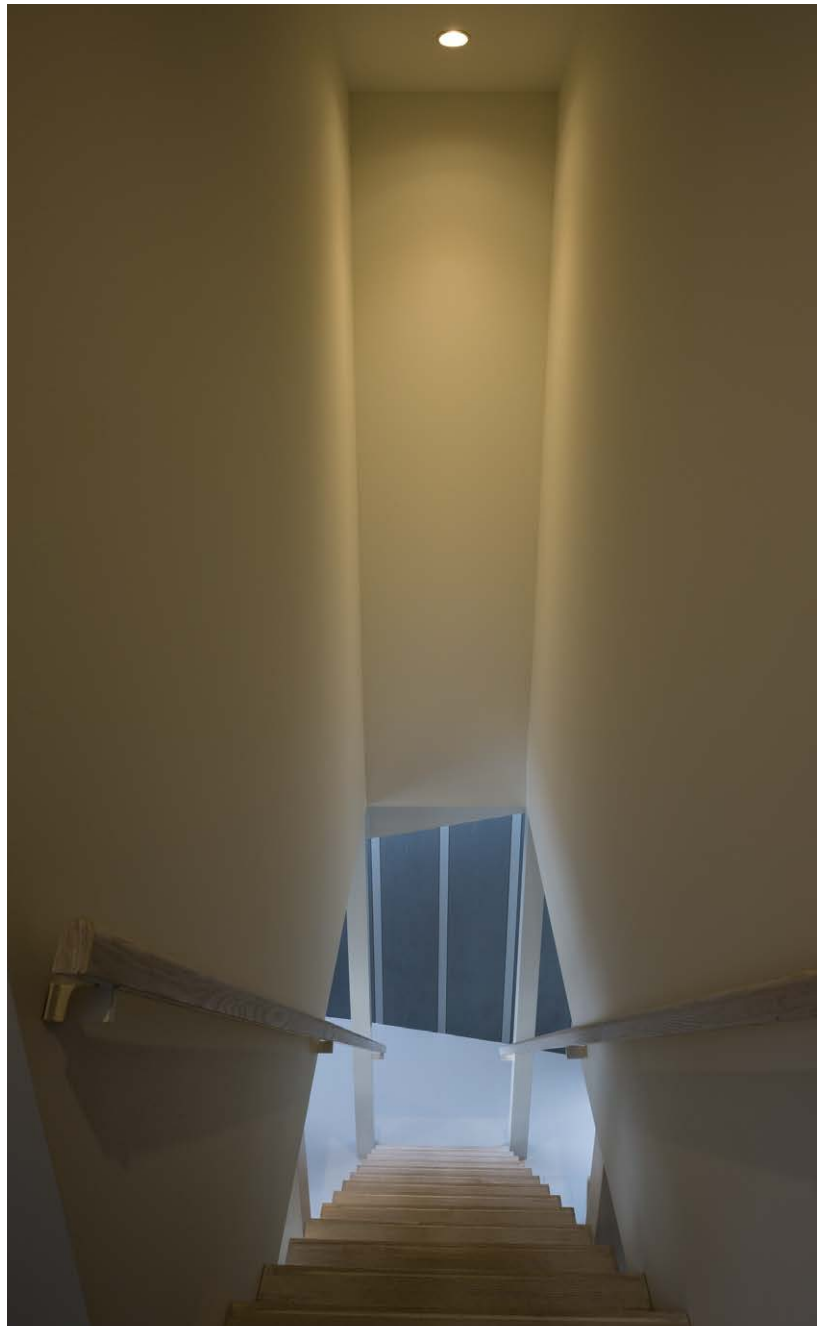
ようやく減築について同意を取り付けると、次は内装に関するリクエストである。施主の奥さまは美容関係の会社を営んでおり、とりわけ白い空間にこだわった。

「海外のラグジュアリーホテルがのった雑誌などを見せて、大理石の白い床が張られた部屋に住みたい、という明確なイメージをおもちでした」

既存の構造材を残してリフォームするといっても、土台はガタガタの状態。結局、軸組をジャッキアップしてベタ基礎を敷き直し、東材も補修するとなると、それだけで多額の費用が発生する。限られた予算のなかで、高価な建材を選ぶ余裕は残されていない。そこで標準的な内装材をうまく工夫して使うことで、壁と天井、床を白で統一したシャープなリビング空間を実現した。「小山登美夫ギャラリー」をはじめ、数々のホワイトキューブを手がけてきた建築家の面目躍如である。だが、それだけでリフォームを終了するのでは何かが足りない。単に減築して耐震補強するだけではない、プラスアルファがほしい。おふたりはそれを、



北側からホールを見る。
真壁の柱のリズムが、庭
へと続く長細いホールの
シーケンスを強調して
いる。



↓見晴らしのよい2階の
ルーム1。真っ白に統一さ
れた1階とは対照的に、
合板の色味を生かして
いる。

↑階段。既存の階段を
改修して直階段に。ホー
ルとつながったことで、2
階に温かな空気が上っ
ていく。



建築確認申請が必要ない10㎡以下の増築で
実現しようと考えた。

「最初は庭のスペースに、2階だけ10㎡の
見晴らし小屋みたいなものを飛び出させて、
下はピロティにする案を考えました。お施
主さんも好感触でしたが、僕らのほうがな
んだか納得がいかず、これじゃないな、と。
増築することで既存部分の意味をガラリと
変える、いわば、転覆させるほどの効果
は生まれていないように感じたのです」

建築評論家の植田実さんは、ムトカ建築
事務所の作風を「即興的な建築」と評して
いる。その特徴が最もよく表れている改築
が「天井の楕円」である。都内にある建築
家設計の住宅。天井高が3・5mある45㎡

のリビングルームが「あまりに茫漠として
いて、うまく住みこなせていない気がする」
という施主に対し、高さ1・8mの中2階
の床を挿入するという回答を出した。床と
いっても、その大部分は楕円形の穴が穿た
れているので、穴を切り取った「残り縁」
で巨大な空箱のウエストを内側からギョッ
と固めたかのような改築。一瞬でひらめく
アイデアながら、構造補強であり屋内庇に
もなり、何より子どもがぐるぐる走りまわ

れる、こんな楽しい空間はない。

小さな増築が 既存部と減築部を つないだ

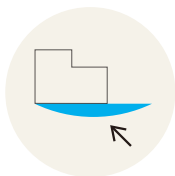
では、この鎌倉の家をどうすれば、転覆
させられるか。次に出てきたのが、庭の南
端に小屋を建てる別棟案。3畳ほどの空間

は、息子さんが帰省した折などに寝室とし
て使えるゲストルームとなる。これも施主
には好評だったが、やはりあと一歩、何か
が足りない。そうこうしているうちにコロ
ナ禍もあいまって家族の状況が変わり、10
㎡の用途が自由になった。そこで建物の西
側に細長い通路でアプローチする案が浮上
さらにそれを発展させたのが、既存建物と
庭の矩形に、そこから飛び出した「のりし
る(代)」のような半月型のホールを西側に
くっつけた現行案である。

長い小径を歩いてきた来客は、ゆるやかに
カーブする外壁に誘われるように左手に
進み、弧の中央に穿たれた玄関扉を開ける。
すると内部は白い膜を通してやわらかな天

Special
Feature
Innovative
Extension
Case Study

02



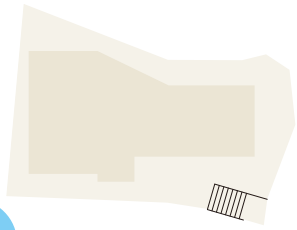
Ie to
Niwa to
Shiro

井光が降り注ぎ、左に進めばリビングへ、右に進めばガラス戸を出て庭のテラスへとつながる。

「この案が浮かんだときに、これだ！ と思いましたがね。外から帰宅して家に入るあいだに、あるいは家から庭に出るあいだに、異質な空間を必ず通ることになります。玄関機能を延長したこの「代」によって、リビングと庭が等価につながり、既存建物のあり方を「転覆した」と感じたのです」

ホールの天井は、まるで船底のように、ゆったりとしたカーブを描いている。その白い膜の上部は空気層となっており、冬季は陽光で暖められた空気をリビングに送り込み、夏季は室内の熱気を排出できる。視覚的な役割だけでなく、空調としての機能ももたせているのだ。風がよく通ることも

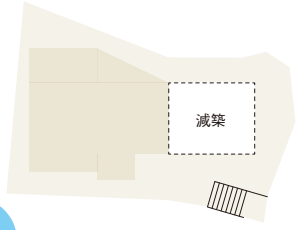
減築＋修繕＋増築の流れ



0

既存建物

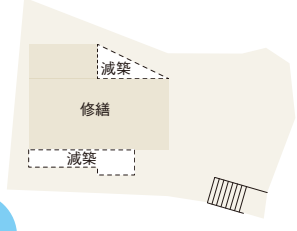
法定面積を大幅に超過して住宅が建てられており、加えて接道条件も満たしていないため、再建築不可だった。



1

南側ボリュームの減築

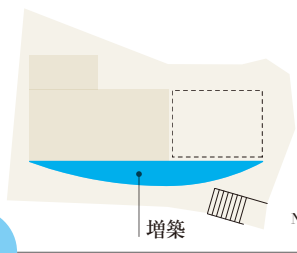
敷地造成時の盛土が地盤沈下したことで、南側半分は基礎が割れ傾いていた。南側のヴォリュームを取り壊し庭として、構造と環境の健全化を図った。



2

法定に合わせた北側ボリュームの修繕と部分的減築

増築可能な10㎡以内の余地を考慮しつつ、さらに法定面積の超過分を減築。加えて、主屋は屋根と骨組みを残して適宜修繕した。



3

確認申請不要な10㎡以内の増築

法定面積以内かつ10㎡以内の条件を最大限に生かした増築を行う。特定の機能がある部屋ではなく、あえて「代」を増築した。



前面道路から、非常に細い小径を通して敷地に行き着く。

「代」を増築したことによって既存建物のあり方を「転覆した」と手応えを感じられた

あつて、夏でもほとんど冷房をつけないで済むという。

再建築不可の老朽住宅、地盤の弱い崖地、建蔽率超過の既存不適格、居住者の高齢化、工事車両が入れない現場……。まるで日本の住宅が抱える諸問題を凝縮したかのような既存住宅の条件にもかかわらず、ムトカ建築事務所はスマートに、あたかも一筆書きのように、さらりと解決案を示した。

「床面積を削ることで、逆に豊かになりますよ」という建築家の予言どおり、モノにあふれていた以前の家から大量の不用品を処分し、コンパクトな終のすみかにリフォームした施主夫妻は、じつにいきいきとこの家での暮らしを楽しんでいるように見えた。

After

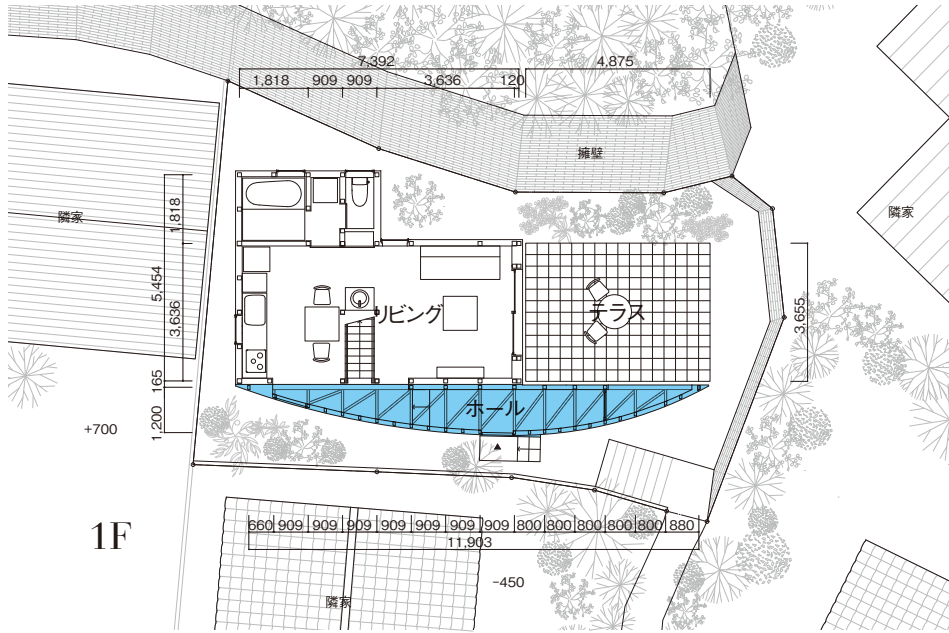
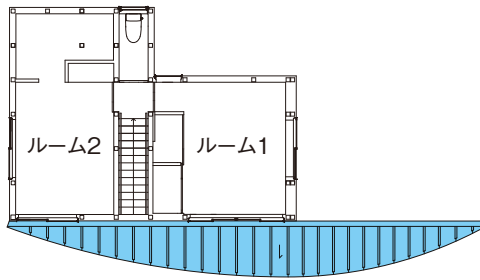
増築後の平面図



0 1 2m

1/200

2F

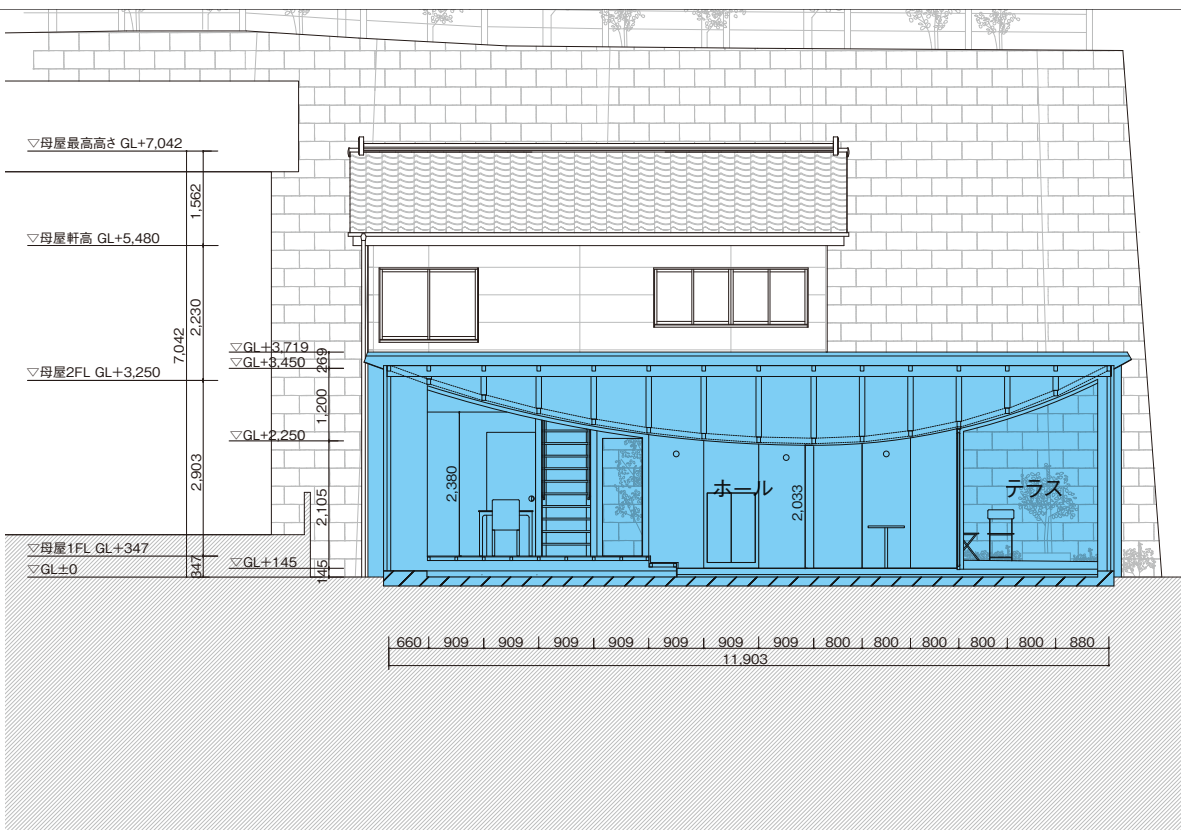


1F

増築後の断面図

0 1 2m

1/125





家と庭と代

建築概要

所在地 神奈川県鎌倉市
 主要用途 専用住宅

設計 ムトカ建築事務所
 構造設計 坂田涼太郎構造設計事務所
 構造 木造
 施工 コポットハウス
 階数 地上2階
 敷地面積 106.18㎡
 建築面積 42.10㎡
 延床面積 75.50㎡
 設計期間 2018年7月～2020年2月
 工事期間 2020年3月～2021年4月

おもな外部仕上げ

屋根 主屋：既存瓦屋根
 増築部：ポリカーボネイト板
 外壁 主屋：窯業系サイディング
 増築部：リシン吹付け
 開口部 アルミサッシ 制作FIX窓
 外構 タイル

おもな内部仕上げ

1階 ホール
 床 コンクリート金ごて押さえ
 壁 バイン合板、FB
 天井 ファブリック
 1階 リビング
 床 Pタイル
 壁・天井 ビニルクロス
 2階 ルーム1、2
 床 タイルカーペット
 壁・天井 シナ合板 OS

ムトカ建築事務所

村山 徹

Murayama Toru

むらやま・とおる／1978年大阪府生まれ。04年神戸芸術工科大学大学院修士課程修了。04～12年青木淳建築計画事務所勤務。10年ムトカ建築事務所共同設立。関東学院大学研究助手。

加藤 亜矢子

Kato Ayako

かとう・あやこ／1977年神奈川県生まれ。04年大阪市立大学大学院前期博士課程修了。04～08年山本理顕設計工場勤務。10年ムトカ建築事務所共同設立。奈良女子大学准教授。

ムトカ建築事務所のおもな作品＝「小山登美夫ギャラリー」(16)、「天井の楕円」(18)、「WOTA office project」(21)など。

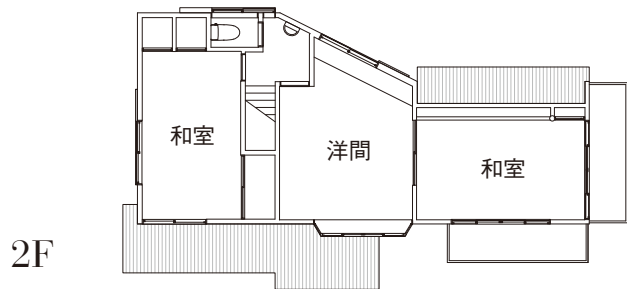
Before

増築前の平面図

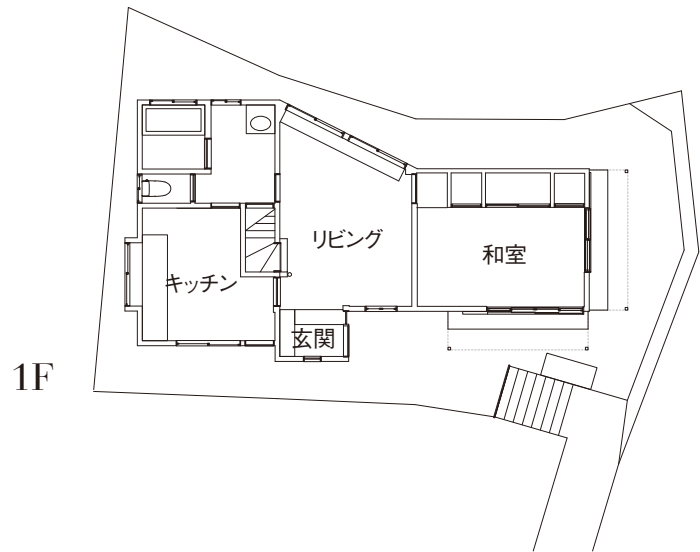


0 1 2m

1/200



2F



1F

増築前の外観



撮影／中山保寛



提供／ムトカ建築事務所

敷地は鎌倉特有の谷戸地形。東側には擁壁がそびえる。既存部は増改築を繰り返し、敷地いっぱいになっていた。

作品

始めの屋根

設計

増田信吾+大坪克亘


主屋と庭のあり方を変える「あわい」



南側から見た、「始めの屋根」と主屋。4.5mm厚のスチールプレートの屋根根を、70mm角のスチール鋼が支える。

Special
Feature
Innovative
Extension

Case Study **03** Hajime
no
Yane



増田信吾さん、大坪克亘さんが
増築したのは
屋根でもあり渡り廊下でもある、
鉄板と柱に階段をかけた
軽やかな構造物。
独立していた住居と庭と
はなれの関係性を一変させた

伝統と変化。日本語でいうと正反対の言葉のように感じられるが、英語ではtradition（伝統）とtransition（変化）と、まるで双子のような言い方をする。お正月の行事は、毎年恒例ではあるが、決して同じではない。変化しない部分に本質が見出されて伝統が形づくられ、本質を揺るがす変化が起これば、それを変革などという。

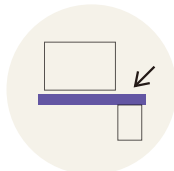
建物の増築をテーマにした際は、まず既存の主屋自体の変化を考える必要がある。しかし、なかには伝統に対する回答が見え隠れし、その位置付けまで考察したくなる作品もある。増田信吾さんと大坪克巨さんが増築を手がけた「始めの屋根」は、そんな作品のひとつである。



階段は、はなれと2階をつなぐ動線でもあり、ブレースでもある。

Special Feature
Innovative Extension
Case Study

03



Hajime no Yane

転換期の量産住宅

東京・練馬区。駅から車で10分ほどの住宅街に「始めの屋根」はある。施主は教育関係の仕事に就いている。広い庭に魅力を

両端の鎖どいは屋根を引っ張って共振を低減させ、雨どいとしても機能する。



まだ名前のない何か。
そこから検討をすることが、
私たちの仕事だと思っています

感じてこの土地を購入した。施主からは、既存の主屋とはなれを現代の生活に合わせて改修すること、そして庭を生かす提案が求められた。

既存の主屋は、1972年に建設された

ナショナル住宅R2N1900型という、当時ヒットを記録した軽量鉄骨2階建てのプレハブ住宅だった。増田さんと大坪さんは、初めてここを訪れた際の印象を「実直でよい建物だと思いました。戦後の住宅不足が解消される直前の商品。まだ問題への切実さや社会的な責任が感じられました」と言う。確かに、住宅業界はこの時期を境に、スタイルやバリエーションを追い求めるようになった。各プレハブメーカーが採用していた多様な規格が、材料の問題や限られた敷地で1部屋でも多く確保できるように、910mm前後に縮まった時期でもある。戦後の住宅不足と都市への人口集中を背景に、1戸でも多く、1部屋でも多くという課題に応えようとする姿勢が、この住宅か

主屋とはなれとの隙間を
つなくように立つ。



らは感じられる。またその結果か、外観は同じ大きさの掃出し窓と戸袋がセットで横並びになり、南向きを強く意識した姿をしている。

こうした主屋の歴史、特徴をとらえた増田さんと大坪さんは、まず現代の生活スタイルに合わせて、より南面を意識した間取りへと変更。1階は3室をまとめて鉤手のLDKとし、南側を連続させた。2階の個室も部屋境にあった押入れを北側へ移して南面を広くとった。そのうえで居室部分には、内側から断熱改修を行っている。

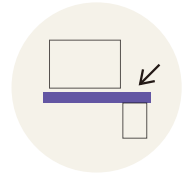
柱はほとんど壁に隠れているが、部屋をまとめたリビングには70mm角ほどの細い柱とブレースが現れることになった。はなれも同様に断熱改修をし、書斎にあてがわれた。

広がりをもち塊に近い外を

リビングから庭を眺めると、室内の柱とほぼ同じ太さ、同じ色の柱が屋外にもあり、室内外の連続性を感じる。ただ、建物の柱芯とは位置がずれている。階段があり、地面の影が軒がつくる影よりも深いので、上へ何かある。しかし、室内からは、その実態がよくわからない。増田さんと大坪さんは「確かに、広縁をつくって床面の連続をもった塊に近い外。そんなものが感じられるよう意識しました」と言う。掃出し窓で切り取られた部分のみの屋外だけではなく、もっと広い庭のまとまりが感じられるように、という意味だ。どの窓から見ても、増築した屋根は断片的にしが見えず、確かにより広い屋外の存在を想像させる。気づく

Special Feature
Innovative Extension
Case Study

03



Hajime
no
Yane

と、窓から身を乗り出していた。

まだ名前のない何か

窓の先には、4本の柱があり、敷地いっぱいには屋根の下面が見える。柱は一列に並ぶので、床面積は0㎡。柱の上は1本の梁がつなぎ、屋根は4・5mmの鉄板である。階段は、2階のベランダにつながっているが、ブレースと横転防止の役割を果たすべく、基礎にしっかりと固定されている。

この屋根を理解するためには、まず設計プロセスを覗く必要がある。増田さんと大坪さんは「建物と庭の連続性を考えた際、まずベランダやサンルームが思い浮かびます。ただ、その解は別の問題を生み出しかねない。熱さ、湿度、汚れ、結局使わなくなれないか。だとすると、どのようなものができるとしようか。まだ名前のない何か。そこから検討をすることが私たちの仕事だと思っています」と述べる。

高い位置に設けた屋根は
建物と庭の樹木のスケールの差も
調整する

出発点は、最初の実測時に現地で描いた主屋とはなれをつなぐ屋根らしき線。しかし主屋に屋根を付加すると、構造に負担をかけることになる。室内への日照も減ってしまう。そもそも、室内空間を増やすことが、外へ出るきっかけになるのか。湿気の問題が出るかもしれない。そんな懸念や疑問を検討した結果、むしろ屋根は建物から分離したほうがよい、と結論が出た。また、この屋根は夏至のときははなれまでの動線に影を広げ、室内の照度に近い面積を庭に増やす。一方、冬至のときは1階も2階も日射はささげられない。図面上で屋根を上下させながら、この高さが決まった。

仕上げは3分艶の塗装で、屋根の下面だけ全艶となっている。明るさよってはステンレスのような光沢で、日中は庭の緑や周辺をおぼろげに映し、夜は室内や隣家の明かりを集めて、この庭の照明になる。柱の太さが、ベンチの脚やベランダの手すりと同じような寸法であることも手伝い、家具のような親しみも感じる。ただ、建物と

しては、やや華奢な印象。とくに、初めて階段を上ったときは、少し緊張感もあった。
揺れる手すり、揺れる屋根

階段の手すりにはフラットバーを使っているが、支柱間より5mm長いものを溶接し、最初からたわませている。手になじむように縄跳びの紐のようなビニルが巻きつけてあり、握った後は手すりが上下に揺れる。よく見ると、屋根も曲がっている。雨の汚れがつかないように、全体はゆるやかなボール状になっている。また、雨仕舞のため屋根上面にはリブが一周し、対角に設けたステンレスの鎖どいを伝って雨が地面に落ちる。この鎖どいは、風が吹いてもほとんど揺れない。というのは、地面の下に基礎があり、リブごと屋根を引っ張り下げ、基礎に固定しているためだ。引っ張り下げること雨勾配が生まれ、全体が対角線方向にも曲がっている。薄い鉄板なので、大きめの鳥が止まれば樹木のように揺れる。屋根も手すりも、普通は水平で揺れないものとして考える。その結果、部材はより厚いものが必要になり、構造計算でもたわみと戦うことになる。しかし、最初からアーチとして計算すれば、部材は薄いままでよく、揺れ方の検討で済むのだという。

成長したアカマツを庭になじませる

少し曲がった、しかも揺れる屋根。これが、3本のアカマツと一緒に庭の空を覆っている。住宅の建設当時、このアカマツは

もっと背が低く、室内からの風景にも収まっていたのだろう。しかし、現在では大きく成長し、住宅は置いてきぼりになってしまった。増田さんと大坪さんは「屋根を高い位置に設けたことで、約50年のあいだに生まれた建物と樹木のスケールの差を今一度調整することにもなりました」と言う。

ちなみに、この庭を手がけたのはフルヤプランツ。南の庭には、紫色の花を付けるニンジンボクを植え、フェンスに沿ってモッコウバラなどの白い花を付ける低木や蔓植物が植えられている。台所のある東の庭には、ザクロを中心に、レモングラス、ローズマリー、ラベンダー、ブルーベリーといった果実のなる低木やハーブが植えられた。屋根とアカマツの下には、ハーブのよい香りと、何日か前に焚き火をしたらしいにおいが漂って、この庭がもたらす恵みと、

確かに生きた場になっていることがうかがわれた。

今、私たちが暮らす住宅の原風景は、住宅改良や生活改善の機運が高まりをみせた大正・昭和初期にあるといわれている。この時期に、縁側には経済的理由から省略することや、部屋として使用できるよう幅を広げることが求められるようになった。その結果、新たに住宅と庭園をつなげる要素

としてパーゴラの設置が流行した。庭園もまた鑑賞本位から運動や園芸などを楽しめる実用本位の庭園へと変化を始めた。始めの「屋根」は一見ただけでは形容が難しく、日本の住宅がもつ伝統からはかけ離れた存在のように思われる。しかしよく見ると、実は大正・昭和初期以来の住宅の実用化と庭園の実用化という2つのベクトルが交差する地点に位置付けられるのではないか。



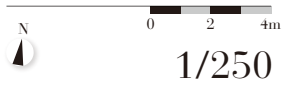
↑屋根の下面は全艶で、光を反射して屋根下の空間を明るく照らす。

↓主屋1階のリビングダイニング。中央はもともとあった壁の名残。

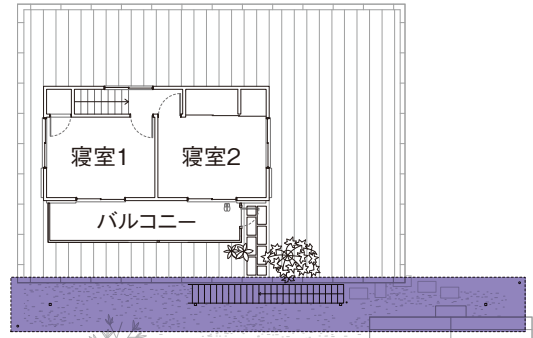
↓2階の寝室からは、バルコニーと屋根を通過してアクセスする。



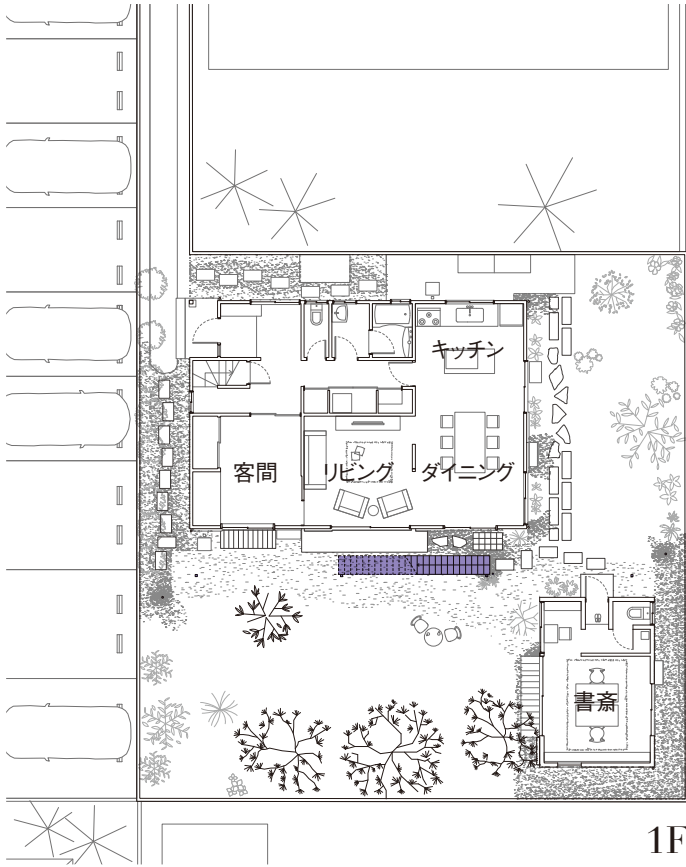
増築後の平面図



1/250



2F

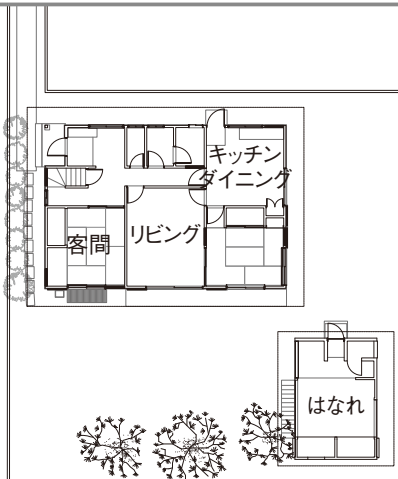


1F

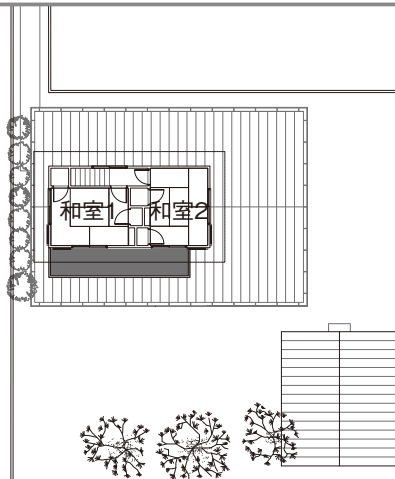
増築前の平面図



1/350



1F



2F



始めの屋根

建築概要

所在地	東京都練馬区
主要用途	専用住宅+渡り廊下
設計	増田信吾+大坪克亘
構造設計	平岩構造計画
構造	渡り廊下：鉄骨造（主体構造） 基礎：独立基礎
施工	渡り廊下：若槻興業（基礎工事）、 ウスマ（鉄工事） 住居改修：田中工務店
階数	渡り廊下：地上1階 母屋：地上2階 はなれ：地上1階
敷地面積	374.7㎡
建築面積	101.7㎡ 渡り廊下：0㎡
延床面積	127.4㎡
設計期間	2015年9月～2015年12月
工事期間	住居改修：2016年1月～2016年3月 渡り廊下：2016年4月～2016年6月

おもな外部仕上げ

渡り廊下	
屋根	フッ素樹脂塗料 全艶
柱・手すり	フッ素樹脂塗料 3分艶
階段	フッ素樹脂塗料 3分艶
	屋外用タイル PVCロープ

おもな内部仕上げ

主屋 キッチン	
床	合板フローリング
壁	防水PB モザイクタイル
天井	化粧PB
リビング ダイニング	
床	合板フローリング
壁	PBのうねクロス貼り
天井	化粧PB
2階 寝室	
床	畳
壁・天井	PBのうねクロス貼り
はなれ	
床・壁・天井	ラワン合板 EP

増田信吾+大坪克亘

増田信吾

Masuda Shingo

ますだ・しんご／1982年東京都生まれ。07年武蔵野美術大学建築学科卒業後、増田信吾+大坪克亘共同設立。15年コーネル大学客員教授。19～22年明治大学特任准教授。

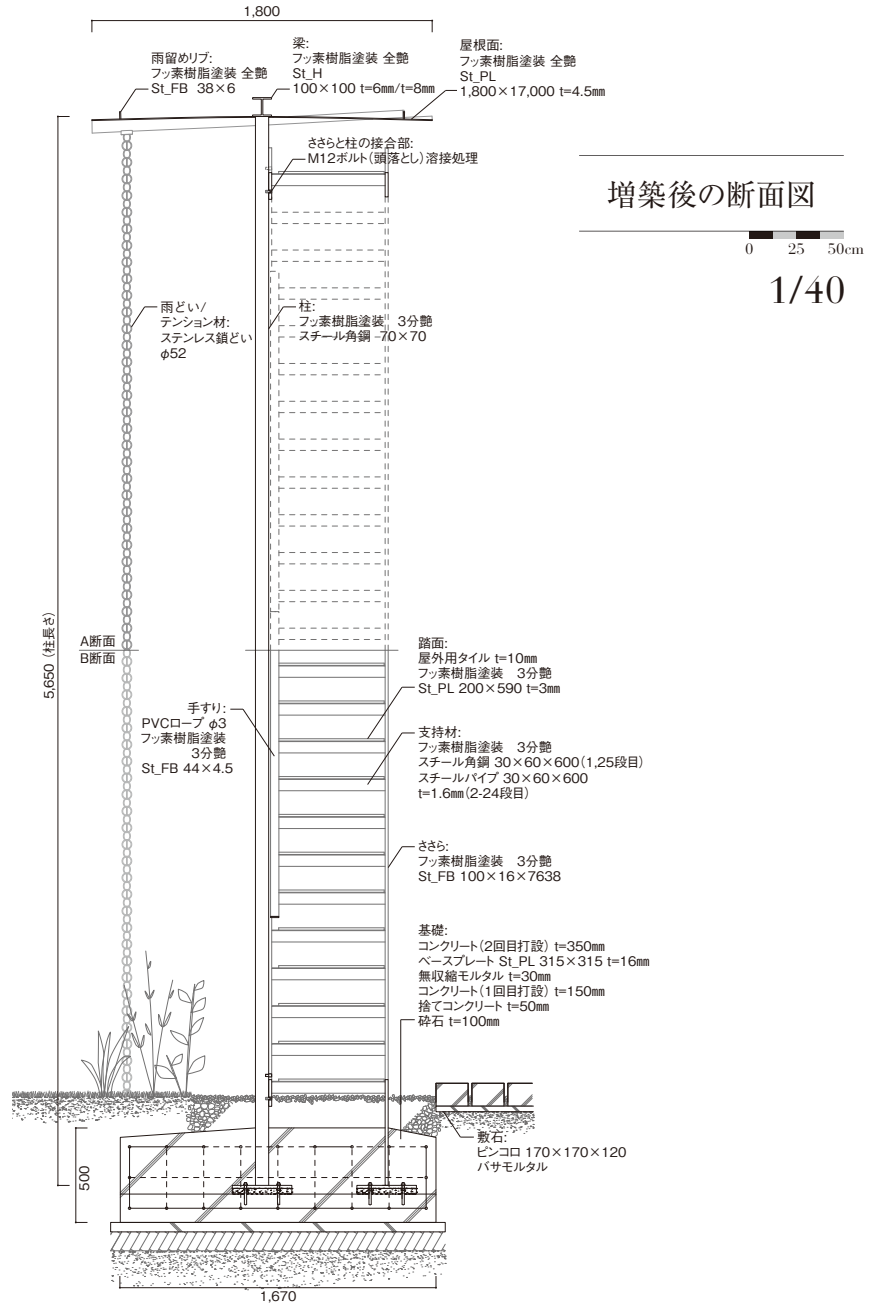
大坪克亘

Otsubo Katsuhisa

おおつぼ・かつひさ／1983年埼玉県生まれ。07年東京藝術大学建築科卒業後、増田信吾+大坪克亘共同設立。

増田信吾+大坪克亘のおもな作品＝「躯体の窓」(14)、「リビングプール」(14)、「街の家」(18)など。

右が大坪さん、左が増田さん。



増築前の外観

提供/増田信吾+大坪克亘

隣の駐車場より見た、増築前の様子。主屋とはなれば、それぞれ独立している。

外から見た渡廊。方立を根太と垂木で挟み、ボルトで留めたというシンプルなつくり。



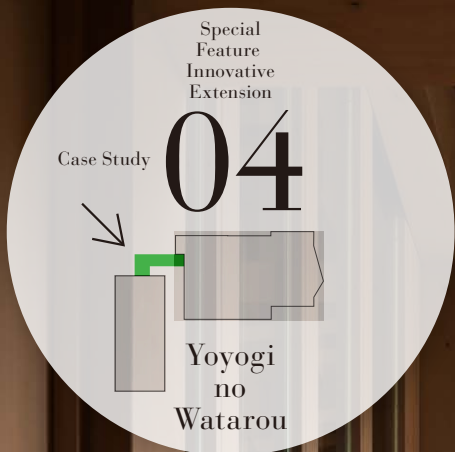
特集 / 主屋を変革する増築 / ケーススタディ 4

わたろう
作品 代々木の渡廊

設計 平井 充 + 山口 紗由

RC造と鉄骨造に木造で増築する

平井充さん、山口紗由さんが設計した
清家清によるふたつの近代住宅を
つなぐ渡り廊下は、
空間と空間以上に、住み手同士の関係に
大きな影響をもたらした

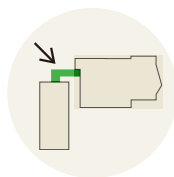


壁面はガラスだが、階段下は吹きさらしで半屋外のようにになっている。ヒノキの温かな質感も感じられる。



Special
Feature
Innovative
Extension
Case Study

04



Yoyogi
no
Watarou

→娘夫婦の住宅である
はなれの居室から渡廊を
見る。開放的になり、隣
地の緑を景色に取り込め
るようになった。



わずか6㎡の増築で
2棟がつながっただけでなく
まったく裏だった空間が明るく



←搬入通路はひとりがや
っと通れるほどの狭さだ
ったため、人力で運搬可
能な部材という制約もあ
り、設計を工夫した。

→RC造の主屋のユーテ
ィリティに、木造の渡廊が
つながる。

清家清の モダニズムと 向き合おう

「代々木の渡廊」は、清家清（1918 - 2005）が設計し1970年に竣工した「代々木の家」と、後にその施主の娘夫婦のために南側に近接して建てられた独立住宅をつなぐ木造の渡り廊下の増築である。

敷地は三角形に近い変形四角形で約300㎡ほどあり、変形十字路の北東の角地で、大谷石の堂々たる擁壁の上に位置する。東側に眺望が開けているので、主屋を西側に寄せた東向き配置が決定されたのである。主屋は鉄筋コンクリート造地下1階地上2階建てである。大谷石の擁壁に穿たれた門を抜けて地下1階の玄関扉を開けると、大谷石敷きの広々としたエントランスがあり、そこがすぐに階段室となっている。階段が動線を中心であり廊下はない。1階の北側は天井高を大きくとったリスニングルーム、階段室を挟んで南側にLDKがある。黒く塗られた天井は高さ2400mm、フローリングのダイニングにカーペット敷きのリビング。東面は左右いっぱいにはFIXのガラスが嵌まり、低く抑えた生け垣越しに眺望が楽しめるようにつくられている。部屋が中央に立つH形鋼の柱は清家の「斎藤助教授の家」の円柱を想起させるが、この上部には大きな壁梁が通っているので、補強として入れたものでもあろう。2階は寝室と子ども室である。近代の核家族住宅の原則に則りながら清家清という建築家の作家性がよく表れた住宅である。

近接する娘夫婦の家は、鉄骨の棟持柱と

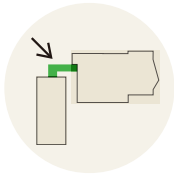


その両脇の2層分の鋼製ブレースが特徴的だが、この架構形式も清家がよく用いたものである。リビングは主屋の庭側にも開口を設けているが、水まわりを主屋側に設けているため、主屋と距離をとって独立性を保っている印象がある。清家は自邸だけでなく「久が原の家」や「東ヶ丘の家」などいくつか主屋に増築というプロジェクトを手がけているが、それらに比べると両者の関係がはるかに希薄な2棟である。これが「代々木の渡廊」計画のコンテクストである。

近代建築を 改修する愉しみ

設計者でメグロ建築研究所を主宰する平井充さんは、大学、大学院で学びながら、吉原設計事務所に勤務する。事務所を主宰していた吉原正（1922-2014）は、F・L・ライトに師事し東京藝術大学で教鞭をとったことでも知られる天野太郎と共同事務所を構えた人物である。平井さんが同事務所に入所したときは、天野はすでに亡く、吉原も高齢であった。そのため事務所の仕事にはこれまで設計した建物の改修が多くあり、天野の代表作である「武蔵風山カントリー倶楽部クラブハウス」の改修は、吉原が事務所を閉じた後も平井さんが継承し、彼の代表的な仕事のひとつとなっている。

21世紀になって事務所勤めを始めたにもかかわらず、20世紀の近代建築の改修を仕事として与えられ、次第にその改修自体に興味をもつようになった。平井さんは、近代建築の改修は原設計のなかに建築家の思想が見え、それを読み解き、読み替えてい



くことが、民家のようなアノニマスな建物の改修よりおもしろいのだという。

そしてあるとき、独立直後に手がけたりノベーション「三姉妹の家」(2009)の施工者であるオカダコーポレーションから連絡があり、「平井さんはリノベーション好きですよ」と相談を受けたのがこの仕事の始まりだった。

101歳の依頼主

今回の増築の依頼主は今西芳之(1919-2021)といい、主屋の施主でもある。主屋はオカダコーポレーション(当時は岡田建設)の施工ではなかったが、元施工者がすでに亡くなっていたため、今西さんは清家の建物の施工を数多く手がけているオカダコーポレーションに相談し、平井さんが建築家としてかわるようになった。平井さんに依頼をした時点で今西さんは101歳だったが、杖もつかずに階段を上り下りする元気な方であったという。そしてこの場所に渡り廊下を増築することを考

え、スケッチも用意していた。

今西さんがこの増築を欲したのは、自分のために食事の世話をしてくれている娘への気遣いからであった。隣接していても娘夫婦の家と直接つながる動線はなく、2世帯住宅のようにありながら独立した戸建て住宅のような関係だったため、娘夫婦の家から主屋への食事の運搬は外部の急な階段を通るしかなかった。そこで今西さんは

「10年もてばいい。自分がいなくなった後は解体・撤去が簡単なように」という条件で設計を依頼した。

6²m²の増築

主屋のユーティリティから娘夫婦の家の居室を結ぶこの廊下は、敷地の最奥部に位置する。それゆえ人手で搬入可能な材で構

独立しているふたつの住宅を、自立性は保持しながら
さりげなくつなぐ



主屋とはなれをつなぐ、かなり急な階段。

築されることが設計条件として課せられた。柱を束立てにして軸組を構成し、方立を根太と垂木で挟んでボルトで留めて屋根と壁と床をつくるという、いたって簡潔な工法である。階段の段板を支える部分にのみ鉄骨を用いているが、それも職人がふたりに持てる重さのものである。壁面にはガラスを嵌めているが、階段部分は吹きさらしで気密はない。質感を考慮してヒノキ材を用い、仕上げはせずに組み上げている。わずか6m²の増築で2棟がつながっただけでなく、これまでまったくの裏だった場所が隣地の庭を借景とした少し明るい場所になった。

機能不全の処方箋

この増築の発端は、2棟の隣接する核家族住宅の片方が機能不全を起こし、もうひとつの住宅から補助を受ける状態が発生したことによる。

さて、核家族住宅とは、かつての「家」からデモクラティックに離陸し、個として確立した近代人によって構成された最小単位の家族が住むための空間図式をもつ建物のことである。それは、互助共助という名の干渉や抑圧から解放され、自由と平等を保障された夫婦を中心に育てられる自立した家族のゆりかごである。

しかし核家族住宅はほどなく機能不全を起こしはじめた。それは前提とした個人の容ないし前近代性に起因する。なかでも老いは核家族住宅において想定されていない個人の変容であった。そこに2世帯住宅という加齢による機能不全を補うための変異形が生まれた。家族なんだから助け合お



↑主屋のリビング。

↑右がRC造の主屋、左が鉄骨造のはなれ。増築以前は中央の階段を使って行き来していた。



↑はなれのリビング。

清家が設計したふたつの建物の独立性、2世帯住宅のようでありながらじつは独立したふたつの戸建て住宅であり続けたこと、そしてそのように住み続けられたことは、清家と今西さんが共有した近代の核家族住宅の矜持の表れであったのかもしれない。そう考えると、ふたつの住宅の独立性を保持させながら軽くつないだだけの「代々木の渡廊」は、近代が生んだ核家族住宅が正しく更新されるまでの「理想」の生命維持装置として用意されたものだったのではないかと思えた。

新たに多世帯住宅を構想し、互助や共助を含んだかたちの新しい生活像を構築しようという思想を否定したいわけではない。それはひとつの試みとして意味がある。しかしそれはポスト近代の正統な着地点なのか、ということとはよく考えておかねばなるまい。かつての「家」的な空間が再来することで、悪しき社会制度が召喚されてしまう可能性がないとはいえないからだ。時として空間は制度を規定する。それゆえ私たちは、戦後民主主義の象徴であった核家族住宅の理想としたところを再考し、その延長上に着地する道筋を模索する必要があるはずなのである。それまでは近代の核家族住宅の理想を安易に捨ててしまうわけにはいかない。

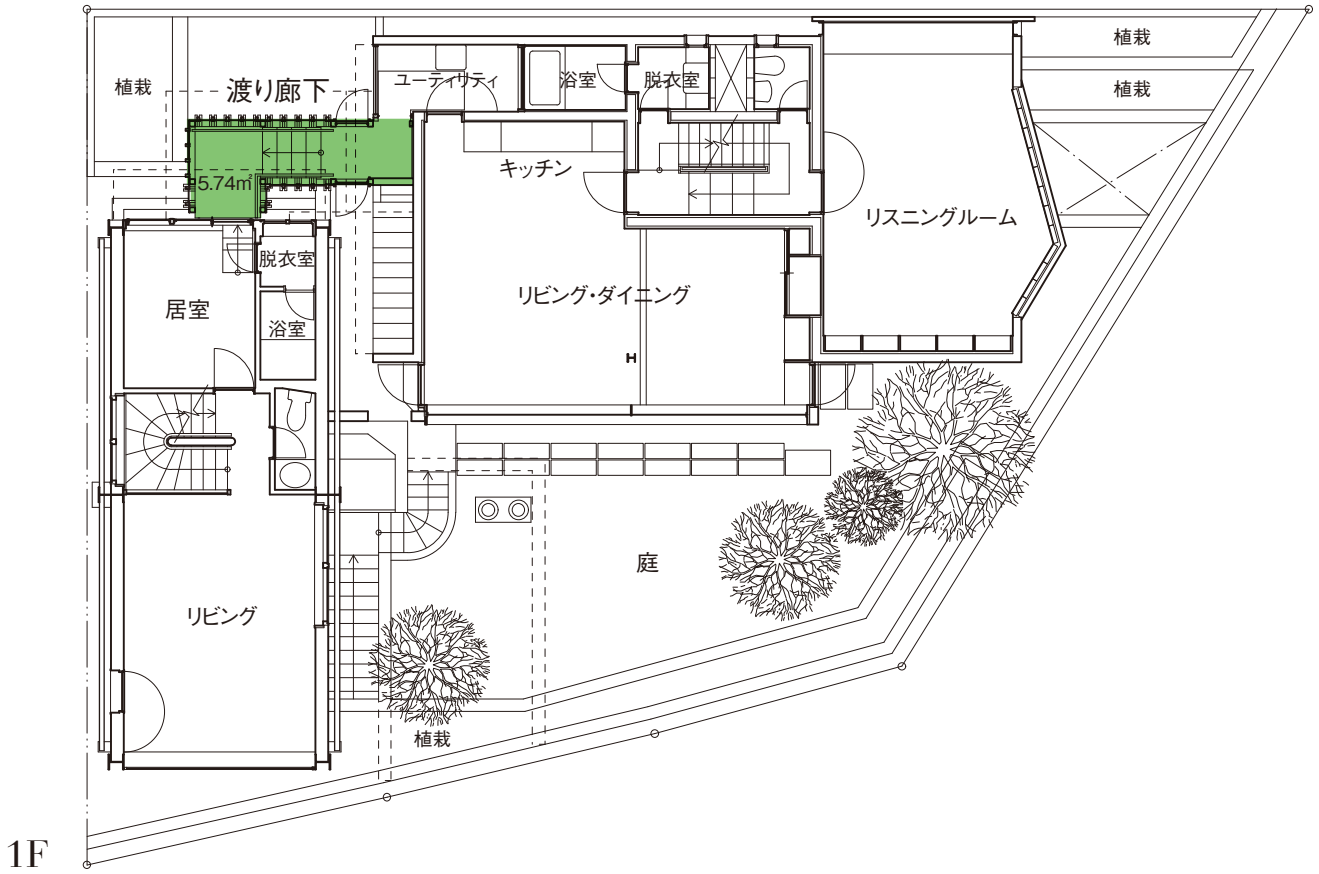
After

増築後の1階平面図



0 1 2m

1/150

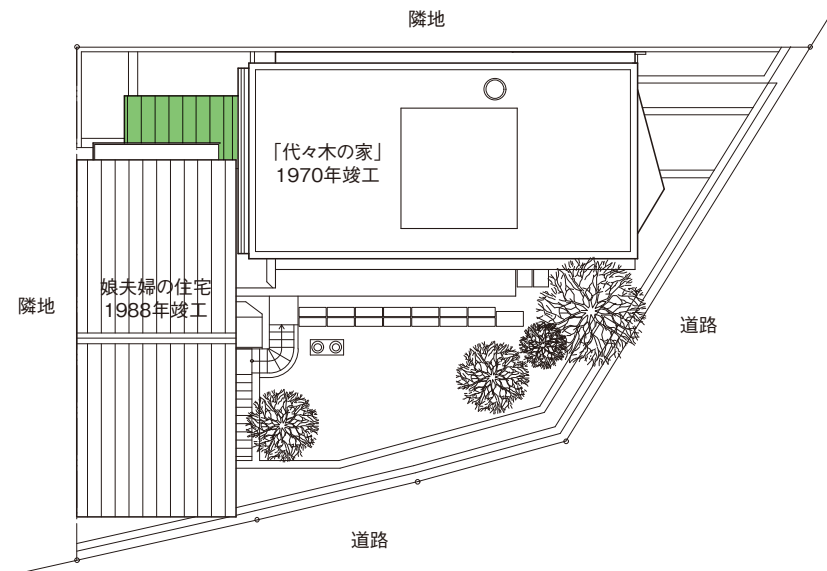


増築後の屋根伏図



0 2 4m

1/250



「代々木の家」の設計者については、『新建築』（1971年1月号）では「難波俊作+デザインシステム」と表記されているが、青図では「清家研究室」とされている。



代々木の渡廊

建築概要

所在地 東京都渋谷区
主要用途 渡り廊下

設計 メグロ建築研究所
構造 木造、一部鉄骨
施工 オカダコーポレーション
敷地面積 297.73㎡
建築面積 154.43㎡ (増築5.74㎡含む)
延床面積 360.22㎡ (増築5.74㎡含む)
設計期間 2019年10月～2019年12月
工事期間 2020年3月

おもな外部仕上げ

屋根 ガルバリウム鋼板堅はぜ葺き
外装 ヒノキのうえ木材保護塗料
(WP) 塗装、
一部ウレタン塗装、
ステンレス板t=1.0HL貼り
開口部 透明ガラス

おもな内部仕上げ

床 ヒノキのうえ木材保護塗料
(WP) 塗装
壁 ヒノキのうえ木材保護塗料
(WP) 塗装、
手すりタモ集成材CL塗装
天井 ヒノキのうえ木材保護塗料
(WP) 塗装

メグロ建築研究所

平井 充

Hirai Mitsuru

ひらい・みつる／1974年北海道生まれ。09年工学院大学大学院博士課程単位取得満期退学。00～06年吉原設計事務所(旧天野吉原設計事務所)勤務。09年Drawing notes共同主宰。14年メグロ建築研究所に改組。

山口 紗由

Yamaguchi Sayu

やまぐち・さゆ／1985年東京都生まれ。10年日本女子大学大学院家政学研究科住居学専攻修士課程修了。09年Drawing notes共同主宰。14年メグロ建築研究所に改組。

メグロ建築研究所のおもな作品
=「重箱ハウス」(17)、「棚畑ハウス」(21)、「高脚楼」(21)など。

Before

増築前の外観



提供/メグロ建築研究所

敷地の最奥で、隣家に対しても閉鎖的な空間だった。右手に「代々木の家」、左手に「娘夫婦の住宅」。今回の増築で両棟を接続させた。

コンコン。

「ごめんください。ここに万博で展示されていた手袋店のショーケースをデザインした建築家はいらっしゃいますか。私は、グエルという者です」

「おーい。アントン！ お客さんだ」

「はい、ただいま。こんにちは。私がおの建築家です。アントニ・ガウディと申します。どんなご用件でしょうか」

ここはスペイン・バルセロナにあるプンティ工房。センドラ通り8番。これはグエル伯爵が1878年パリ万国博覧会のスペイン会場におけるカタルーニャ部門にて展示されていたコメーリヤ手袋店のショーケースをたいへん気に入る、そのデザイナーを訪れてきたという場面である。コメーリヤ手袋店ショーケースは、ガウディが最初にデザインした展示什器のことだ。そのデザインは木製の土台にスチールフレームで構成された6面ガラス張りのモダンなデザインであった。周囲に陳列された展示什器はゴテゴテした古典的な装飾で覆われていたのに対し、ガウディは展示什器を装飾するのではなく、展示物である手袋の装飾に目が行くように配慮した。そのシンプルなデザインに惚れ込んだグエル伯爵が、その建築家に会いにわざわざ工房まで訪ねたのである。これがガウディとグエルの出会い

であり、グエルの狩猟用別荘計画案(実現されず)、グエル酒蔵、グエル別邸、グエル邸、グエル公園、コロニア・グエル教会とガウディの代表作が生まれる土壌ができた。

ところで建築の名作は建築家ひとりの力では生まれない。建築家に全幅の信頼を置く建築主と、建築家の構想を実現する施工者の三者がいて初めて生まれるものである。

その点、ガウディは恵まれていた。大学卒業後、自らのアトリエを構えず、市内にあったプンティ工房に間借りしながら設計活動を開始した。タラゴナ県レウス市にある銅板器具職人の家庭に生まれ、職人に囲まれて育ったガウディは、身寄りのない大都会で働く仕事場として、おそらく経済的余裕がなかったことから事務所を構えずに、さまざまな職人が出入りする工房を自らの活動拠点に選んだのである。

プンティ工房は、エウダルド・プンティという家具職人が開設した工房であり、鍛鉄職人、ガラス職人、石こう職人、木工職人、左官職人らをかかえ、コメーリヤ手袋店ショーケースもここで製作された。ここに1枚の写真(左ページ上)が残されている。中央に正装した青年がガウディ。その右にいるのがプンティである。そして、その後ろにはここに入入りしていた30人ほ

どのたくましい職人たちが、ガウディ青年を囲んでいる。彼らが初期、中期のガウディ建築の名作をつくり出した。ガウディは晩年に「私の唯一の長所は、私のもとで働いている人々の一人ひとりが仕事を十分にできるよう、彼らの能力を引き出すことにある」と述べていたように、プンティ工房の職人のもつ技術を最大限発揮させる術をここで鍛えていったのだろう。コメーリヤ手袋店ショーケースは、まさに鍛鉄、

ガラス、木工の職人技術の結晶である。ガウディと工房の関係は仕事をこなすごとに深まり、グエル邸でピークに達する。革張りの腰掛け椅子の家具にはじまり、木製建具やガラス扉の建具、複雑な幾何学形状の木製格子天井までプンティ工房のありとあらゆる力と技術を総動員して内装をつくり上げた。グエル伯爵が秘書にお金に糸目を付けずにやれと命じたほど、この建築はガウディの建築のなかでも群を抜いて空間の密度が高い。グエル邸はまさにガウディと工房による最高傑作なのである。

グエル伯爵が秘書にお金に糸目を付けずにやれと命じたほど、この建築はガウディの建築のなかでも群を抜いて空間の密度が高い。グエル邸はまさにガウディと工房による最高傑作なのである。

ガウディの建築のつくり方には現代的な側面もあった。設計者と施工者が分かれた体制ではなかった。端的にいうと、構想段階から原寸に至るまで同一人物が携わっていた点で、BIMなどが目指す設計施工一体の製作フローに近いものがある。それはこの約30人の職人集団が構想から施工までを担当していたからこそできたつくり方だ。

ここで長く働いた後に、ここで知り合った生涯の右腕となる彫刻家のリョレンス・マタマラを引き連れて、ガウディはサグラダ・ファミリアのアトリエへと仕事場を移した。プンティ工房なくしてガウディなし。バルセロナに生まれた数々の名作は、30人の職人集団から生まれたのである。



↑グエル邸の内観写真。問仕切りの装飾から家具まで、プンティ工房の職人が施工、製作している。

Antoni Gaudí i Cornet

1852年スペイン、カタルーニャ州タラゴナ県レウス市内で生まれる。銅板器具職人の家庭に生まれ育つ。建築学校の予科のためにバルセロナに移住したのが17~18歳のとき。78年に大学を卒業してすぐにプンティ工房を拠点に設計活動を始める。83年にサグラダ・ファミリアの二代目建築家に就任し、90年頃、聖堂建設現場の敷地内にレンガ造2階建ての事務所を構えた。98年に一度増築し、1906年までにはさらにもう1棟を建設した。プンティ工房を出てからは、すべての建築がこの聖堂敷地内のアトリエで設計されている。26年逝去。

やまむら・たけし / 1984年山形県生まれ。2006年早稲田大学理工学部建築学科卒業。06年バルセロナ建築大学留学。09年早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。12年同大学院博士後期課程修了。12~15年ドミニク・ペロー・アルシテクチュール勤務。16年YSLA Architects設立。早稲田大学専任講師などを経て、20年東京工芸大学准教授。博士(建築学)、一級建築士。

たくましい職人たちを 総動員する ことができる環境で、 設計活動を スタートさせた。

古写真で
みる
建築家の
アトリエ

第1回

古写真を発掘し、
昔の建築家の
アトリエをのぞく。
この場所で、
名作が生まれた。

あのガウディを 生んだ、 プンティ工房

文／山村 健
Yamamura Takeshi

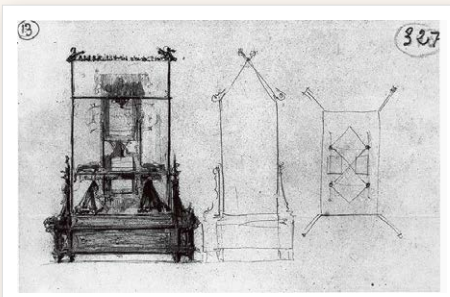


所蔵／Arsiu Càtedra Gaudí. ETSAB - UPC.

↑1878年のプンティ工房の様子。中央にアントニ・ガウディが座し、右にプンティの姿が見える。工房らしく広々とした土間で、天井も高い。

アントニ・ガウディ・イ・クルネット

Antoni Gaudí i Cornet



所蔵／レウス博物館

↑コマーリヤ手袋店ショーケースのガウディ直筆の図面。左から長手立面図、短手立面図と平面図の順に描かれている。

→雑誌に掲載された、パリ万国博覧会におけるスペイン会場の展示風景のスケッチ。



↓プンティ工房で製作されたガウディのライティングテーブル。木工加工と鉄造作が統合されたデザイン。1936年の市民戦争で焼失してしまった。



所蔵／Arsiu Càtedra Gaudí. ETSAB - UPC.



天
球
道
上
の
「
黄
道
」

空環周住器 設計／六角鬼丈



モダニズムが否定したシンボリズム（黄色の軸）の復活も野武士の技のひとつ。

1

現代住宅併走

第五十二回

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

連載

写真／普後均

(六角鬼丈のポートレイトを除く)



現代住宅 併走

Rokkaku
Kijo
×
Fujimori
Terunobu



2

2 / 細い路地の突き当たり
に異様な物体がたたまむ。

3

3 / 写真手前が施主の、その対面の向こう側が施主両親の玄関。



4

4 / 突き当たりの2階は通路を兼ねた温室。
5 / 黄道とは地球

から見た太陽の軌道で、もちろん天動説時代の中国の考え。

5

江

戸時代、隅田川の川向こうといえばディーブな下町で、その先には江戸川が流れ、川を渡れば別の国(下総国=現千葉県)。ディーブな下町と別の国との中間はかつて水田地帯であったが、戦後、住宅地に変わり、新小岩の駅が開かれ、駅の周囲には住宅がびっしり軒を連ね、都心に近いわりに地価が安いこともあって今はマンション街に変わる最中にある。

そんな新小岩の南、住宅と住宅のあいだの広からぬ小道の奥というか突き当たりに目指す石河邸はあった。設計は六角鬼丈。完成は1983(昭和58)年。広い道の角を折れて小道に入り、ひと目見て日本の住宅地とは別の国を思った。イタリアの石畳のストリートの奥ならこんなシーンがあってもおかしくない。とくにイタリア感を醸すのは、小道の右手の家々の立面が奥に延びていった先でカーブして折り返し、左手の立面になって戻ってくるという街並みの連続感にある。

しかし、日本の住宅地には似合わないばかりか、むしろ拒絶感が強く漂う。

六角を重要なメンバーとして含む「野武士」の世代は、戦後の建築デザインの拒絶を旨としてスタートしているから、安藤忠雄の「住吉の長屋(1976)」も伊東豊雄の「中野本町の家」

(76)も通りに対して窓をあけることさえ拒み、小住宅の中に自閉した。六角の策は少し異なり、小道まわりという街並みシーンを含めて極小イタリアに自閉した。

小道の突き当たりに設けられ、イタリア感をもたらす石河邸の庭は、円形をとることで庭というよりイタリアの広場を感じさせるが、六角はこの円形の由来を天球上の「黄道」と説明し、極小広場の1階上辺に黄色いリングをまわしている。

新小岩の小住宅を、宇宙(天球)の中心とみなし、まわりを太陽がまわっている(黄道)なんて真似は、野武士の心意気やヨシ。

宇宙像につながる描像図像は、イタリアルネサンス期の建築家が構想した都市計画や公共の記念碑的大建築なら考えられなくもないが、日本で宇宙像や世界像のようなオーバーな発想をする建築家は限られ、野武士世代では毛綱毅曠と石井和紘が、先達なら磯崎新がそうだった。六角は磯崎アトリエの所員第1号でもある。

円形の宇宙広場のまわりに展開する住宅について具体的に見てみよう。

円の中心点に立って左側(南側)を見ると、1、2階ともただ白い無口な壁が湾曲しているだけ。右側(北側)に目を転ずると、1、2階とも横長の窓が



6・7 / この小さな円庭が、六角の宇宙像のなかでは宇宙の中心にあたる。

6

7

口をあけ、1階をのぞくと中は居間らしい。円を中心に左右対称な平面なのに、無窓と開口、この対比はなぜなのか。
もうひとつ疑問が湧くのは、安藤や伊東のようになぜ完全自閉化せず、右側には大きな窓をあけ、外の光や風を取り込んだのか。街並みレベルでは周囲の住宅地の光景に溶け込むことを拒んだというのに、建築レベルでは右側を外に向かってなぜ開いたのか。

疑問は中に入って解けた。

左側の無窓のほうに入ると、玄関と浴室・トイレと階段室がまずあり、その奥に子ども室、突き当たりには寝室。狭く曲がった階段室から2階に上がると、LDK（居間・食堂・厨房）。

1、2階の間取りを知ってふたつの点に着目した。まず、1、2階の使い分けについて。1階寝室、2階LDKというのは、今でこそ郊外の南北隣棟間隔密集地では散見されるが、40年近く前にはありえなかった。石河邸のまわりの小住宅も1階寝室、2階LDK。六角は期せずして現代の過密郊外住宅のバイオニアになってしまった。

注目のふたつ目は、これこそこの住宅の肝所なのだが、1階をざっと見ても、2階のソファに腰を下ろしてじっくり味わっても、どこにも窓がない、というか正確に申せば、どこにも窓の存在が感じられない。建築基



9

8・9・10/六角の腕のほどを見せる階段室と、上がった先に広がるLDK(居間・食堂・厨房)。

8

10



準法により無窓の住宅は禁じられているから、この家にもちゃんとした窓はあけられているが、視線からは巧みに隠されている。法規に従った窓がコソコソ逃げ隠れているのだ。左側の住宅は、安藤、伊東に負けず劣らず、街並み的にも建築的にも、自閉の道をまっすぐ突き進んでいたホッ。

とすると右手側住宅の広い開口部はなんなのか。左手側の2階LDKの奥には小さな扉があり、そこから外に出ると、温室が現れ、小さな各種蘭が育てられている。外観の正面2階は壁がゲルリとまわっているが、あの内側には温室が隠され、トップライトと裏側から天空光が入る。外廊下状の温室を進むと、またドアがあつて、そこから先は別の家、というか、この家を六角に頼んだ若い施主のご両親の家。二世帯同居の家。だから、ご両親を野武士の刃にかけぬよう気を配り、南に向けて窓をあ

11

11/手すり、柱、梁の組み合わせが六角ならではの繊細さを見せる。12/向かいの両親の家の寝室は野武士ではない。



12

け、住みやすい造りとした。以上ひととおり眺めた後、住宅作家としての六角のすぐれた才について思った。無理を承知であれこれ試みながら、普通なら失敗しそうなところを切り抜けることに成功している。

たとえば階段室。円弧を描いてカーブする壁に沿って細く急な階段が曲がりながら上昇するという難題に、上り口の親柱状の造りと頭のつかえる2階床の造りを巧みに工夫することで、機能上もデザイン上もうまく解決している。あるいは、変形した平面に無理やり押し込んだ食堂も、変形したテーブルを使い、形勢逆転して、心地いい。中スケールから細部スケールにかけてのあたりに、野武士らしからぬ上品で巧みな技量が発揮されている。「細部スケールにかけてのあたり」とは、別の領分を引くなら工芸的スケールと



ここだけ見たら日本とは思えない。
黄色のリングが効いている。

空環周住器

建築概要

所在地	東京都
主要用途	専用住宅
設計	六角鬼丈 / 六角鬼丈計画工房
施工	島田建設
敷地面積	180㎡
建築面積	104㎡
延床面積	201㎡
階数	地上2階
構造	木造
竣工年	1983年
図面提供	六角鬼丈計画工房

六角鬼丈

1941年、東京に生まれ、東京藝術大学を経て、スタートしたの磯崎新アトリエに入る。69年、独立後、正廣を鬼丈に改名し、「野武士」世代の重要メンバーとして活動を開始。作風は、許されれば野武士ぶりを発揮したが、公共建築においては抑制を利かせ「東京武道館」(90)、「東京藝術大学大学美術館」(99)などをつくった。人柄は穏やかで、野武士のなかでは例外的に品のよさを保っていたが、仲間がアブナイことをするときにはちゃんと交じって行動した。



写真提供 / 六角鬼丈計画工房

藤森照信

建築家。建築史家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。工学院大学特任教授。おもな受賞=『明治の東京計画』(岩波書店)で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』(筑摩書房)で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸(ニラハウス)」(1997)で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)で日本建築学会作品賞、「ラコリーナ近江八幡草屋根」(15)で日本芸術院賞。

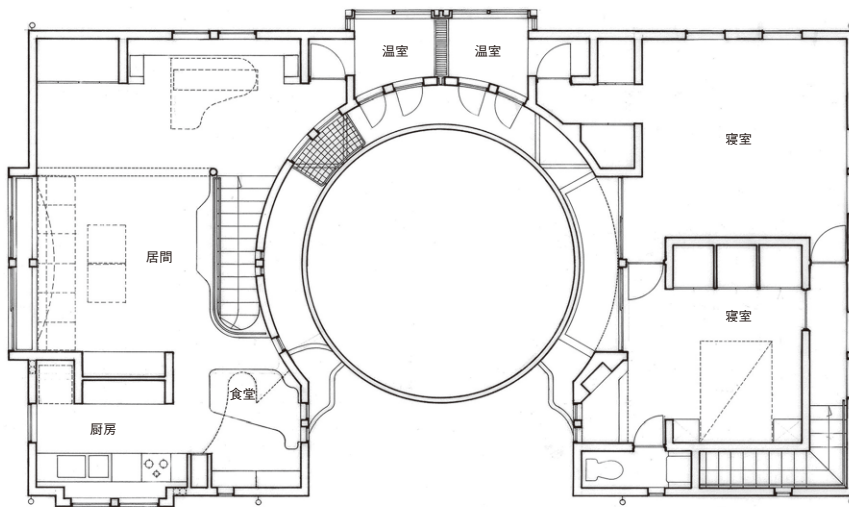


Fujimori Terunobu

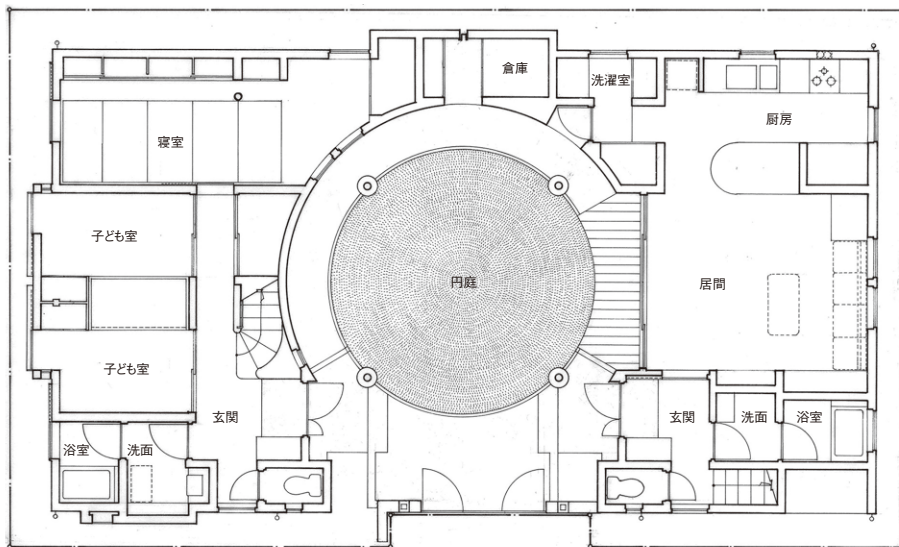
平面図

0 1 2m

1/150



2F



1F

Rokkaku Kijo × Fujimori Terunobu

併住現代
住宅

ヤッパリ。六角正廣(鬼丈)は、東京藝術大学で日本の近代漆芸を基礎づけ発展させた教授を二代にわたって輩出した六角家に生まれ育っている。案内してくれた六角美瑠によると、画家を目指したが、高校時代に家でも目指したが、高橋時代に家でも目指した。『新建築』誌に刺激され、プロダクトデザイナーから建築家へと志望を替えたという。工芸については、家に入りする多くの工芸家たちに交じって育ったから、自然に身につけていたという。

途中で正廣を鬼丈に変えたのは、自分の芸術界でのエリートとしての出自を自己否定するたためか。あるいは、絵や工芸と建築との根本的差に、その差は気づかなければ平気で飛び越せるが、気づくと深い溝として立ち現れるような差に、建築の道に入ってから気づき、変えたのか。

鬼丈という上野の山の野武士の頭目のごとき激しい名は、出自への自己否定かもしれない。六角逝って早3年。

天神ビジネスセンター

Tenjin Business Center

北西角ピクセル部からの全景。



取材・文／大山直美 写真／傍島利浩

天神ビッグバン第1号 世界基準の 複合オフィスビル

昨春秋、福岡地所が福岡市中心部の天神地区で開発中だった複合オフィスビル「天神ビジネスセンター」が竣工した。同ビルは市の再開発促進事業「天神ビッグバン」の規制緩和の適用を受けたビル第1号で、地下2階、地上19階建て。デザインア

ーキテクトはOMAニューヨーク事務所代表の重松象平さん、基本計画・基本設計は日本設計、インテリアデザインはグエナエル・ニコラさん率いるキュリオシティ、実施設計・工事監理・施工は前田建設工業が担当した。福岡地所の田代剛さんによれば、市が規制緩和や容積の割り増し制度を盛り込み、再開発を促す「天神ビッグバン」という施策を打ち出した背景には、この地区にはグローバルなビジネス拠点にふさわしいオフィスビルが少ない現実があったという。同じ課題意識をもち、「福岡をもっとおもしろく」というミッシ

ョンを掲げる同社だけに、一番乗りで参画したのは当然の流れだったようだ。

街のランドマーク となる 象徴的な外観

建築の最大の特徴はビルの足元と頂部のふたつの角をピクセル化して削ることで内と外をゆるやかにつなぎ、交差点角に広場をもたらず一方、街のランドマークにふさわしい象徴的な外観を実現している点にある。

福岡は空港が近いため、高さ制限が厳しく、敷地ぎりぎり建物を見てざるをえないことから、遠方から望めるタワービルを建てにくい状況にあるが、OMAの提案は「シンプルなお操作でありながら、さまざまな与件をクリアしたうえで、非常にインパクトのある外観を生み出し、

かつオフィスらしさも併せもっている。削られた上層階の室内は窓が大きくとれるため、より眺望を室内に取り込め、テナントの付加価値も高めています」

エントランスアトリウム。
左に見える青いガラスボックスは、2階のオフィスロビー。



と田代さんは語る。

「いいトイレ」の実現

もうひとつの特徴は、着工直後にコロナ禍が起こり、急遽可能な限りの設計変更を盛り込んだ点にある。おもに空調の換気システムの見直しと、非接触対策のふたつが軸になったという。

基準階のトイレにも当然コロナ対策は施されているが、それだけにどまらず、どこも最先端オフィスビルにも引けをとらない「いいトイレをつくる」ことを目指したと語るのには、入社早々プロジェクトチームのスタッフとしてトイレづくりを担当した山崎まりあさん。田代さんによると、山崎さんは福岡だけでなく東京の最新オフィスも熱心に見学し、女性の意見を事細かにヒアリングしたうえで、快

適なトイレづくりに取り組んだそうだ。

まず最優先したのは個室数。

「待たずにすむだけでなく、前の人が使った直後という感覚を払拭するために、衛生工学会の算定器具数の最高レベル1（ゆとりのある機器数）+2個を目指しました」と山崎さん。そのうえで、男女トイレの間仕切り壁をずらすことで、従業員の男女比に合わせて個室数を調節できるプランを採用している。

一方、個室数を確保するしわ寄せでスタイリングコーナークラスも浮上したが、山崎さんはその使用頻度がいかに高いかを綿密に調査して社内プレゼンすることで、これを死守。しかも、女性トイレには手洗い器を個室内に設けた広めのブースをふたつ完備した。これは産後復帰した女性が搾乳したり、体調が思わしくないうき休憩したりする場としてトイレを使うこ

女性トイレ

オフィス基準階



↑ きっちり照明計画のなされたスタイリングコーナー。ほどよい明るさのソフトな空間は落ち着いて身繕いできるゆ

とりのスペース。天井から床までのミラーと高低差のあるミラーが並ぶ。



→ 一直線に並ぶ洗面コーナーも、ミラーに高低差をつけ、リズムカルな雰囲気演出。コロナ対応で急遽個別のパーティションが追加された。

← 左に洗面コーナー、右にトイレブースが並ぶ。洗面コーナーの後ろにあるのは、ゴミ箱付きのペーパーホルダー。



↑ 男女トイレとも非接触でドアを開閉できるセンサー付きブースが1室。



↑ 男女ともにブース内は手すり付き。



↑ 体調などによって少しゆっくりできるように、女性トイレには手洗い器付きのブースも2室。



↑ 左右にトイレブースが並ぶ。突き当たりの壁の両サイドにミラー。

男性トイレ

オフィス基準階



荷物を置くスペースはノートパソコンが置ける奥行き。

正面と右手に洗面コーナー。左に歯磨きボウルが設置された歯磨きコーナー。

↑



荷物を置けるスペースを確保。

左右にブースが並ぶ通路から小便器コーナーを見る。ライニングカウンター。

↑



小便器の左右は天井までのパーティションで、プライバシーに配慮している。

↑

バリアフリートイレ

オフィス基準階



L字形カウンターに主要な機器を組み込み、すっきりとした空間と使いやすさを実現した多機能のバリアフリートイレ。

↑

とがあるという話を聞き、少しでもゆったり過ごせる空間を用意したかったからだという。換気効率を高めることでパーティションを天井まで立ち上げたので、プライバシー感がより増している。

また、昨今オフィス内でノートパソコンを携帯する機会が多いため、洗面コーナーや小便器のライニングカウンターなど、荷物を置くスペースは極力ノートパソコンが置ける奥行きを確保。ちなみに、男性トイレには2個ある歯磨きボウルが女性ト

イレに見当たらない理由は、山崎さんいわく「女性は大半がコップを使用するので、通常の洗面器の数を増やしたほうが現実的だと判断しました」。こまやかな配慮が随所にちりばめられている。

さらに、このビルでは、共用部のインテリアデザインを担当したキュリオシテイが、トイレの内装も手がけたというのも商業施設並みの贅沢さ。照明計画もライティング・プランナーズ・アソシエーツ（LPA）が携わっており、入口からトイレゾ

ーン、スタイリングゾーンと奥へ進むにつれて明るさが増し、気分が切り替わるという演出。高低差をつけたミラーがリズムカルに並ぶ洗面コーナーやスタイリングコーナーは、アトリウムなどの共用部のデザインともリンクして見える。

コロナ禍の感染対策

そして、忘れてはならないのが、着工後にこれらにダメ押し

のコロナ対策が加わったことだ。男女とも各ブースに日本初となる非接触でドアを開閉するセンサー、洗面コーナーには個別に仕切るパーティションを追加し、壁面にはゴミ箱付きのペーパータオルホルダーも設置した。「カウンターの奥行きにしても、限られたスペース内で調整するのはとても大変で、やっとそれが収まったと思ったら今度はペーパータオルホルダーの設置場所が必要になるなど、設計を担当した前田建設工業さんには本

当にご苦労をおかけしました」

と田代さん。前田建設工業の座古竜介さんによると、隣接する付室との間の壁をずらすといった、ミリ単位の微調整を要したという。その一方で、鏡貼りのデイトールなど、点と点が交わる納まりが非常に多かったもので、2mmを超える誤差が許されない現場でした」と苦笑する。折衝役はさぞかし大変だっただろうが、「ここまで突き詰めてオフィスのトイレを考える機会はありませんので、福岡地所さんやデザイン事務所と話し合いを重ねながら、

天神 ビジネス センター

Tenjin Business Center



建築概要

所在地	福岡県福岡市 中央区天神1-10-20
事業主	福岡地所
主要用途	事務所、店舗、駐車場等
設計	デザイン・アーキテクト： OMA／重松象平 基本計画・基本設計：日本設計 実施設計・工事監理： 前田建設工業
施工	前田建設工業九州支店
敷地面積	3,917.18㎡
建築面積	3,234.55㎡
延床面積	61,100.34㎡
階数	地下2階、地上19階、塔屋2階
最高高	89.525m
構造	鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造、 免震構造
設計期間	基本構想・基本計画： 2013年7月～2015年4月 基本設計：2015年4月～2016年12月 実施設計：2017年1月～2018年12月
施工期間	2019年1月～2021年9月

おもなTOTO使用機器

オフィス基準階

● 男性トイレ

マイクロ波センサー壁掛小便器 UU117R
壁掛フチなしトルネード大便器・
フラッシュタンク式CS530P
ツインデッキカウンター・ポウル一体型タイプ
歯磨き器 L595
手洗い器 CEL420R、CET930T

● 女性トイレ

壁掛フチなしトルネード大便器・
フラッシュタンク式CS530P
ツインデッキカウンター・ポウル一体型タイプ
手洗い器 CEL420R、CET930T

● バリアフリートイレ

フラットカウンター多機能ユニット

一つひとつ進めていきました。結果的に、男性トイレの洗面コーナーはトイレから距離を置いた場所で歯磨きができるなど、独立性を高められ、使い勝手が向上したかなと思っています」と座古さんは出来ばえに満足げだ。

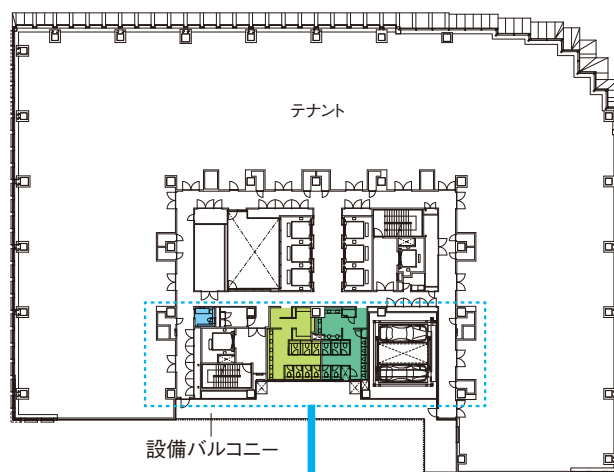
また、使う女性の立場に立って全力でトイレづくりに取り組んだ山崎さんは、最後にこう語ってくれた。

「入社したばかりで右も左もわからないまま始めた仕事でしたが、今までは何気なく使っていたトイレがここまで考えてつくられているのかと気づかされたことが多々あり、トイレを通じてデイベロッパーとしての視点が学べました。みなさんが喜んで使ってくださいばうれいすね」

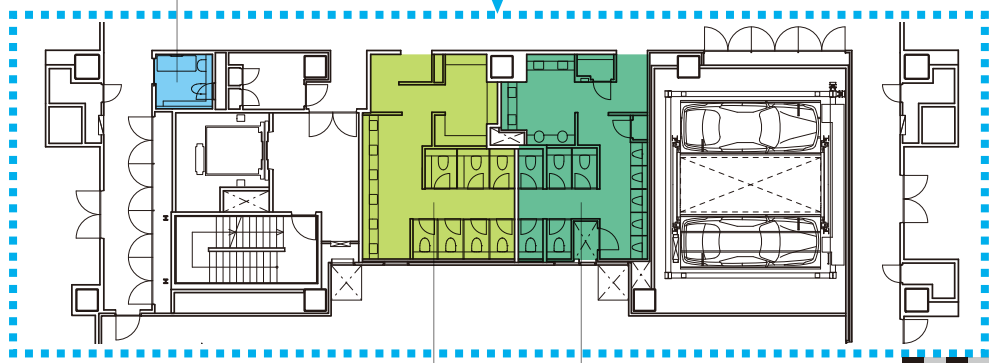
平面図

0 10 20m

1/1,000



バリアフリートイレ



1/350

女性トイレ

男性トイレ



前田建設工業
建築事業本部
建築設計統括部
九州サテライト設計室

座古 竜介

Zako Ryusuke



福岡地所
開発事業三部

山崎 まりあ

Yamasaki Maria



福岡地所
建設部長

田代 剛

Tashiro Go

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくと、
お役に立つ情報を心がけています。
あわせてご注目ください。

News 2

米国で開催された見本市「CES2022」「KBIS2022」に出展しました

世界最大規模の技術見本市「CES2022」(1月)と、北米最大規模の国際見本市「KBIS2022」(2月)に出展しました。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、CESはオンライン出展、KBISはタッチモニターによりバーチャルショールーム*

ーム*を体感していただく展示としました。TOTO CLEANOVATIONのコンセプトのもと、TOTOの革新的な技術を集結した最先端のバスルームやウェルネストイレのコンセプトの紹介により、インベティブブランドTOTOを発信しました。



*KBIS2022でのバーチャルショールーム→<https://virtualshowroom.totousa.com/>

News 3

「第17回TOTO水環境基金」助成先団体を決定しました

このたび第17回「TOTO水環境基金」の助成先団体を決定しました。選考の結果、国内5団体、海外7団体の計12団体に計2,758万円を助成します。これにより2022年度は、すでに活動中の8団体と合わせて、合計20団体のプロジェクトへの支援となります。「TOTO水

環境基金」は、お客さまにご購入いただいたTOTOの節水商品による節水効果を助成金算出のベースとしています。今回の助成により2005年の設立以来、延べ293団体に対して4億1,936万円の助成を行うことになり、活動地域は41都道府県、17カ国におよびます。



ニュースリリース→http://jp.toto.com/company/press/2022_02_09_011862

News 1

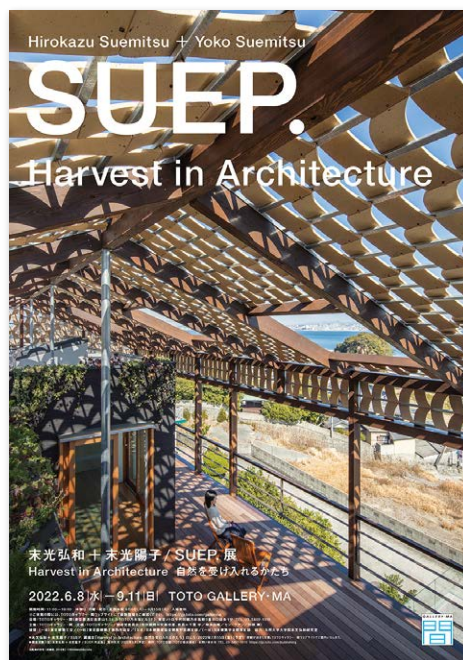
末光弘和+末光陽子 / SUEP. 展 Harvest in Architecture 自然を受け入れるかたち

Hirokazu Suemitsu + Yoko Suemitsu / SUEP.
Harvest in Architecture

TOTOギャラリー・間では、自然の力を最大限受け入れながら、環境と共生する建築デザインを目指している建築家ユニット、末光弘和+末光陽子 / SUEP.(スープ)の個展を開催します。「Harvest in Architecture」とは、自然の恵みを持続的に受け入れ、地球とともに生きるための建築の姿を取り戻そうとする概念です。「Harvest」とは、カラフル(多様)であり、ハピネス(喜び)であり、エネルギー(活力)です。展覧会では地球と建築とのつながりを考え

たプロジェクトを通して、自然の循環を促すかたちを展示します。おもな受賞に第27回吉岡賞(2011年)、第29回芦原義信賞(2019年)、2018年度グッドデザイン賞金賞など、おもな作品に「淡路島の住宅」(2018年、兵庫県)、「九州芸文館アネックス1」(2013年、福岡県/日本設計と共同設計)、「ミドリノオカテラス」(2020年、東京都)などがあります。

展覧会会期	2022年6月8日(水)～9月11日(日)
講演会(予定)	2022年7月15日(金)
展覧会情報	https://jp.toto.com/galleria



B Book

TOTO出版のお知らせ

パビリオン・トウキョウ 2021

Present!

東京オリンピック・パラリンピックに合わせて開催された文化プログラム「パビリオン・トウキョウ2021」の書籍化。日本を代表する建築家、芸術家による9つのパビリオンを、図面やスケッチ、写真で紹介。名誉実行委員長・隈研吾氏による巻頭論文ほか、造園、美術、建築の有識者からの寄稿文も収録。各パビリオンの記録とともに企画への客観的評価から、都

市や建築、アートの今を知ることができる1冊です。

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方の中から、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

監修	和多利恵津子 (ワタリウム美術館)
編集	TOTO出版
定価	2,970円(本体2,700円+税10%)
体裁	A4判変型(270×210mm)、 ソフトカバー、200ページ
発行	2022年3月



I Information

TOTO乃木坂ビル

東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル

3F TOTOギャラリー・間
電話/03(3402)1010
定休日/月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始
入場料/無料
※最新情報は、TOTOギャラリー・間ウェブサイト
(<https://jp.toto.com/gallerma>)をご参照ください。

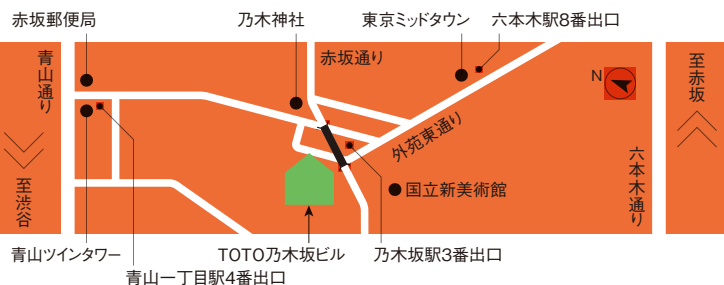
2F Bookshop TOTO
電話/03(3402)1525
定休日/月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・日曜日・夏期休暇・年末年始
詳細はBookshop TOTOウェブサイト
(<https://jp.toto.com/bookshoptoto>)をご参照ください。

2F TOTO出版
電話/03(3402)7138
全国の書店でお求めください。
直営店Bookshop TOTOでもお求めになります。

B1・1F セラレーディング
電話/03(3402)7134(東京ショールーム)
定休日/月曜日・祝日・夏期休暇・年末年始
※事前予約制。
変更の可能性があるため、詳細はウェブサイト
(<https://www.cera.co.jp/showroom>)をご参照ください。

アクセス

- 東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分
- 都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車8番出口徒歩6分
- 東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車4a番出口徒歩7分
- 東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車4番出口徒歩7分



N News

News 4

TDYアライアンス活動が 20周年を 迎えます

2002年より、リフォーム分野で業務提携を結び、住まいの空間提案を行ってきたTOTO・DAIKEN・YKK APの3社アライアンス活動は、本年20周年を迎えます。2022年1月時点、3社の拠点となるコラボレーションショールームは全国13カ所に

およんでいます。3社からのライフスタイル提案「十人十家」を通じて商品のみならず、リモデル後の暮らしの提案を強化し、これまで以上に実りある豊かなリモデル事業へ発展させ、お客さまの暮らしの価値向上を目指します。



リフォーム情報サイト「十人十家」→<https://re-model.jp>

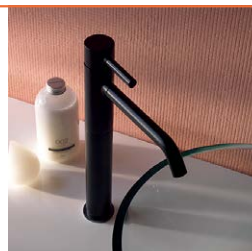
C Cera

セラレーディングのお知らせ

イタリア・ZUCCHETTI社水栓に 新色が追加されました

世界で活躍するルドヴィカ&ロベルト・パロンパがデザインした水栓、「PAN(パン)」と「JINGLE(ジングル)」のシリーズに新色が追加されました。写真のエンボスドマットブラックのほか、エンボスドマットホワイト*、ブラッシュドニッケルが登場。インテリアに合わせて選ぶ楽しみが高まります。

*エンボスドマットホワイトはJINGLEシリーズのみ



エンボスドマットブラック
PANシリーズ
湯水混合栓 ZU6218-N1
希望小売価格 97,500円(税別)
当商品を掲載した「Additional Collections 2021」はウェブサイト、またはファクスにて、ご請求ください。
ウェブ <https://www.cera.co.jp>
FAX 03-3402-7185

次号『TOTO通信』は2022年7月発行の予定です。

上質で心休まる
穏やかな時間をすごす



シンラ
SYNLA

これがTOTOの、いたれりつくせりバスルーム。「SYNLA」の先進機能



ファーストクラス浴槽
身体をやさしく包み込む心地よさ



楽湯(肩楽湯・腰楽湯)
たっぷりのお湯で肩と腰を心地よく刺激



調光調色システム
くつろぎの光を気分にあわせて調節



床ワイパー 洗浄(きれい除菌水)/おそうじ浴槽
ボタン一つで、床も浴槽も自動洗浄

お問い合わせは、TOTO お客様相談室へ
0120-03-1010

受付時間 9:00~17:00
(夏期休暇、年末年始は除く)

TOTOホームページ
<https://jp.toto.com>

※詳細はカタログまたは弊社WEBサイトをご覧ください。

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客様No.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999
*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客様からお預かりした個人情報は、
関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(<https://jp.toto.com>)をご覧ください。